

セカイにひとり 中 (二)

麦 (穀物 P)

目次

第一部	セカイにひとり 中(二)	3
第五章	煌めく街、夕闇に捧げる千夜の誓い	4
第二部	遠き母の背を追いかけて	123

第一部 セカイにひとり 中(二)

第五章 煌めく街、夕闇に捧げる千夜の誓い

(World Line Kigumi-E to Kigumi-D via Chiya)

「——はよう、ココアお姉ちゃん」

「むにゃむ、はっ！」

起き上がった瞬間、ごいんと何かにぶつかつた。おでこを押さえながらベツドの脇を見ると、同じようにおでこを押さえなくてうづくまるりぜちゃんの姿が

あつた。

「ココア……お前やつぱり『お姉ちゃん』で起きるんだな」

「えへへー」

「……とりあえず朝だ。ジョギングに行くぞ」

「行つてらっしゃい、私はもう一眠りするね。おやすみ……」

「いやココアもだ」

「えー」

「朝から動いて健康になろう」

そんな殺生せつしような。私はパン作りのためならいくらでも早起きできるけど、

ジョギングは勘弁してほしい。

「ところで今何時？」

「五時半」

「うえええっ!？」

まだ日が出たばかりみたいだと思っていたら五時半！　リゼちゃん早起きでとても元気だなー……

「いち、に、いち、に」

「いひ、にー、ひー、ふー……」

ラビットハウスの前で準備運動をして、街中まちなかへジョギングに出た。少しペースが速いなと思いつつ、なんとかリゼちゃんについていったけど、あっという間にへとへとになってしまった。もうだめ、たすけて。軍人さんみたいな力の持ち主と街の国際バリスタ弁護士女子高生を比べちゃいけない……

「これからみんなを探すんだろ？　やっぱり体力はつけておかないとな」

「力仕事はリゼちゃんにお願いするよ……」

ふらふらしながらどうにかラビットハウスに帰りつき、代わりばんこにシャワーを浴びてすつきりした。今日は日曜日、私とリゼちゃんが一緒にお仕事をする日だった。

「さあ、今日も大賑わい間違いなしね、ココアちゃん、リゼちゃん、よろしくね！」

「はい！」

サキさんの予言どおり、今日はひつきりなしにお客さんが来た。客席の間を二人で舞うように行き来してお客さんを出迎え、注文を取り、コーヒーやサイドメニューを届け、そして見送る。あつという間に時間が経ち、昼に交代で休憩をとった時以外は時間の流れを意識しないまま、夕方四時のカフェタイム営業終了の時間を迎えた。

今日の夕食は私とリゼちゃんだけで摂る。私手作りの野菜炒めと、リゼちゃんが仕込んだご飯を食べつつ、リゼちゃんが口を開いた。

「なあココア。サキさん？ のことなんだが」

「サキさんのこと？」

「ああ……その、サキさんがもしチノの母親なら、本当は『もういない』はずだろ？」

「うん」

リゼちゃんも当然思い至るはずだった。サキさんは私とリゼちゃんが知る元のセカイではとうに亡くなっていて、私達は直接見知っているわけではなかった。名前が同じだったり、ラビットハウスでタカヒロさんと一緒に仕事をしていたりするなど、さまざまな状況から推測して、チノちゃんのお母さんと同一人物だと考えているに過ぎなかった。

「このセカイで、みんなのことを思い出した私が記憶をたどって、その記憶に出てこない人、知らない人はサキさんだけだった」

「それは私も同じ。サキさんだけは記憶になかったんだ」

「サキさんって、何者なんだろうな。いや、チノの母親っぽいことはわかるんだが、このセカイにはチノがいないだろ？ まるでチノの代わりに現れたみたいだ」

「うん。このセカイで明らかに変わっていることが分かる人だから、みんながいなくなった、というか別々のセカイに散らばってしまったことのカギになるかもしれない」

「？ 別々のセカイに散らばった？」

「あ、そうか。そのあたりの話はまだしてなかったね。この後まだ時間ある？ ちよつと会わせたいというか、話を聞いてほしい人がいるんだ」

「いいぞ。時間なら空いてる。というかわビットハウスで一緒に暮らしているんだから、時間があるのは一緒だろ？」

「そういえばそうだったね、あはは」

そうだった、今はリゼちゃんと共同生活なんだった。

夕食の片づけをして、私の部屋に来てもらう。部屋の中をぴよこぴよこはねていたティッピーを捕まえ、呼びかけた。

「もしもし？ そっちの私起きてる？」

『はいはい、ココアお姉さんですよ？ もしかしてリゼちゃんも隣にいる？』

「いるよ！」

「いるぞ」

『リゼちゃんとは初めましてだね。私は保登心愛です。ただし、並行世界のだ

けど』

「ココア？ 並行世界の？」

目を回し始めたリゼちゃんに、まずは私のほうからかいつまんで説明した。

「このセカイには、いくつもの並行世界があるんだ。私がいたセカイとリゼちゃんがいたセカイも並行世界で、本当ならもうそれつきり交まじわることはなかった。でも、私が『まじゅつ』でセカイを接続して、こうしてリゼちゃんに出会った」

「へ？ 魔術？」

『こちらこそうちの私、いきなりそんな説明したって混乱しちゃうだけでしょ。間違ってはいないけど』

「はい……」

リゼちゃんは完全に目を回してしまい、ティップーを枕に倒れてしまったた

12
め、目を覚ますまでしばし話は中断となった。

『改めましてこんばんは。並行世界のココアです。区別するために「ココアお姉さん」と呼んでね。えっへん』

「よ、よろしくお願いします。……お姉さん？」

『うん。私は二十五歳で、そっちの私が十八歳だから、正しょうしんしょうめい真正銘のお姉さんですっ！』

「そ、そうなんですか」

『うーん、やっぱりゼちゃん敬語で喋ってる調子が狂うなー、私も同じココアだと思っおもていつも通り話してほしいな？』

「わ、わかりま……わかった」

『よろしい♪』

ここから、ココアお姉さんによる並行世界の理論的な話が始まった。私がちよつと前に聞いた話に、ここまでで分かったことを付け加えた感じの内容だった。

『まず、私の世界では時空についての研究と技術開発が進んでるんだ。私はその研究者の一人なんです』

「そつちのココアはすごいな……こつちのココアはアホっぽいけど」

「もー!! いきなりひどい!」

『ふふつ、そつちの私も数学や物理の素養そようはあるから、勉強するとすぐに私みたいな科学者にはなれそうだけど、でもパン職人さんの方が合つてそうだしなあ』

「時空パン職人になれば解決しそうだね」

「街の国際バリスタ弁護士になる件はどうなったんだ」

「あ、じゃあ街の国際バリスタ弁護士時空パン職人でどうかかな？」

「……やっぱりアホっぽい……」

「ひどい!？」

『さて、説明を始めましょう。まず、この宇宙には、無数の並行世界があります』

「はい？ SFか何かか？」

『いい反応だね！ 話を鵜呑みにしないのは良い傾向だよ。でもとりあえずは私の荒唐無稽な話を聞いてみてから考えてほしいな』

「わかった」

『無数の並行世界はいろいろな条件、たとえば今日のご飯で食べたもの、扉を開けて右足から踏み出すか、左足から踏み出すか、そうしたちよつとしたこと

で生まれて分かれていく』

「うん」

『こうして分かれていった多くの世界は、ほとんどの場合は実はそんなに大きな違いが生まれないんだ。右足から踏み出したり、左足から踏み出したりくらいだと、そもそもが起きる事象にほとんど差がないし、もう少しちよつとした違いが出たとしても、まるで一つにまとまるかのように同じような動きと経過になる』

「ほとんどの場合は違いが生まれず、となると……違いが生まれるのはどういう時なんだ？」

『いい質問だね。実はまだうまく条件がつかめていないけど、仮説として「世界が衝突しょうとつした時」というのを考えています』

「世界が衝突……？」

「確か前にそんなこと言った」

『そつちの私も前の話を覚えててえらい！ あれから少し私の研究が進んで、そつちのみんなの身に起きたことが、まさに世界が全く違うように分かれてしまいう時に起きるんじゃないかと考えたんだ』

「世界が違うように分かれる時に、私達がそれぞれバラバラの世界に分かれる……？」

『一緒に過ごした仲間がバラバラになってしまふのは今回の事例が初めてで、他の場合でも起きるかどうかはまだわからないけど、人が巻き込まれる可能性は十分考えられる』

「……なんだかわからない」

『うん。私も論文にまとめる前のメモ段階で頭を抱えているところなんだ』

「バラバラに分かれた後は、みんなその世界が当たり前になるように、他のみ

んなのことを忘れちゃうのかな。最初の私やりぜちゃんみたいに」

『おそろく』

前聞いた時よりも理論の組み立てが進んだみたいだけど、それ以上に複雑になっっているみたいで、新しい情報が加わって逆によく分からなくなつた。まるでお父さんが大学で講義したり発表したりしているのを聞くときみたいな感じだった。

『並行世界の衝突が起きる条件もまだ分かっていなくて、まず何によって世界が引き合うのかを解明する必要があるんだけど、少なくとも、そっちの私を持つ力を使うと、特定の場合に限り、意図的に世界を接続できると言うことは分かっている、それを実際にやってみたのが、そっちの私がいた世界とリゼちゃんの世界をつなげた時だった』

「世界を接続……？　なんだか分からんな」

『説明は難しいけれど、両方の世界の条件がすり合わせられて、たとえばそれぞれの世界にしかない人——そっちの私とリゼちゃんが同時にいても矛盾が起きないようになる、という感じ』

「そんな感じか……」

『世界が接続できる条件も未解明だけど、私は仮に、私の技術による観測をした結果の自己認識として「世界が近づいた時」と表現しているよ』

「……分かるような、分からないような。でもなんとなく分かりそうな気がするようなしないような。……ここまでのいろいろ研究できるとは、まさにココア博士だ」

『まだ博士号は取ってないけどね』

「私も博士って呼ばれてみたいな」

『そつちの私はパン博士になるといいかも。パンについていろいろ研究してるでしょう？』

「パンの研究でもいいの？」

『なんでも。世界にパンに関する新しい知見を示せたら博士だよ』

「やってみようかな……」

『やってみよう！』

『世界を接続するためにそつちの私だけが使える力、それは私の世界の科学でも説明がつけられていなくて、今のところは「魔術」と言わざるを得ないような力なんだよね。世界を跨またげるなら、直接行ってそつちの私を研究し尽くしたいけど』

「私を研究？ ……ハッ！ もしかして私バラバラに解剖かいぼうされちゃう!？」

『解剖はしないかな。でもお風呂場で裸に剥むいて全身をくまなく調べるかもしれないねー』

「……えっち」

『並行世界の自分自身からその言葉をもらうとは思わなかったなー』

私達どうして茶番みたいな掛け合いをしていると、リゼちゃんがぽつりとつぶやいた。

「なるほど、いろいろ考えてもやっぱりよく分からない」

「分かったような気分になったけど、分からなくなつたね……」

ココアお姉さん（仮）による小一時間にわたる講義が終わっても、リゼちゃん首をかしげたままだった。

「詳しくはおいおい理解するとして、ひとまず今はココアの方でみんなと再会できるといふ理解でいいか？」

『うんうん、そんな感じで覚えておいてくれるといいよ』

「わかった」

『それで、今そつちの私とりぜちゃんがいる世界のことを、私は“Kigumi-E”と呼んでいる。これはそつちの世界の青山さんが名付けてくれた世界の名前をそのまま使ったよ』

「“Kigumi-E”か。これが他のみんなの分あるということになるのか？」

『その可能性が高いね』

私とりぜちゃんが無事再会してこの世界にいる。でもまだ他のみんなはない。

『まだみんなのことは搜索そうさく中ちゆうだけど、次は千夜ちやちゃんのいる世界が見つかったよ』

「ほんとう!？」

『うん。またそっちの私に「接続魔術」を使ってもらうことになるね。今度も
そう大きなエネルギーはいらないはず』

「その『まじゅつ』って今すぐできる？」

『うーんとね、そちらで三日後に実行すると成功する』

「三日後……」

今まで探してきた日数に比べればあつという間だったけど、なんとももどかしい。こればかりは仕方ない。その間にもやることはまだまだたくさんある。千夜ちゃん以外の他のみんなの行方の手掛かりになるものがないか探さないと
いけない。

『それで、ね。今度は少し注意が必要なんだ』

「どんな？」

『千夜ちゃんは、あのセカイでは木組みの街にいない。ふたりが知っている都

会の街、^{百の橋と輝きの都}に^{かがや}いる』

思わず「なんで？」と言いかけたけど、セカイが違うのだから、住んでいる場所が違っても不思議ではないかもしれない。

『千夜ちゃんは千鳥さん——そっちの私は覚えていると思うけど、千夜ちゃんのお母さんのことね——と、お父さんと一緒に住んでいるよ。おばあちゃんは木組みの街にいるのは元の通り』

「そうなんだ……」

『だから、世界をつなげた後、ふたりにはちよつとお仕事をしてもらう必要があるかな。指令書^{しれいしょ}を作ってみたから、そっちの世界で読める形で送るね』

間もなく、スマートフォンにメッセージが届いた。そのメッセージに添付^{てんぷ}されていたファイルを開くと、ファンシーというか、ファンキーなイラストが目^めに飛び込んできた。

「ぶっ、……ココアはやっぱりどの世界でもココアらしいな……ふふっ」

「リゼちゃんひどい！ 私はもつとうまく描けるもん！」

『力作なのになあ……』

ちよつと悲しそうなココアお姉さん（仮）を遠隔でよしよしして、ファイルの続きを読んだ。

最初の方はココアお姉さん（仮）が話してくれた内容のまとめになっていた。千夜ちゃんはお母さんお父さんと都会の街のほうにいますということ、近々木組みの街に引っ越してくる予定だけど、千夜ちゃんは友達がいる都会からあまり離れたくないらしい。そこを私とリゼちゃんが仲良しになって木組みの街に転校しても大丈夫だと思ってもらってこっちに来てもらう。

ここからは、リゼちゃんのとくと同じように、何らかの手がかりを使って記憶を取り戻していく。そのような感じでやっついていこう、そう締めくくられて

いた。

「なるほど。課題がいくつかあるな」

そうリゼちゃんが出て、いくつか手元の紙に書き出した。

「まずは千夜のいる都会までの交通手段だ。いざとなったら親父に頼んでひたすら車でぶっ飛ばすという手もあるが、なにせ電車で何時間もかかる場所だ、車だともっとかかる」

「そっか、たしかに遠いよね……」

「次に千夜と会って話をするまでのホテル、これは例の青山さんつながりのあのホテルがあればいけそう」

「ふむふむ」

「そして、千夜の居場所。最悪家の前で待ち伏せしたら捕まえることはできるが……」

「どう？ そっちの私の方からなにかわかることはある？」

『そうだねー、千夜ちゃんの学校とかよく行くところとかを調べることはできそう。今週末までに送るよ』

「ありがとう、そっちのココアが調べてくれるなら心強いな」

「ねえ私はー？」

「そのぼやぼや度が減ったら心強いと思えるようになるかもな」

「ぶー」

「ははっ、冗談だよ。ココアはそばにいてくれるだけで心強いよ。私を見つけてだして記憶を取り戻してくれたし」

「でしよでしよー」

「あまり調子に乗るんじゃない」

「あははっ」

ひとまず、次の水曜日に『まじゅつ』によって世界をつないで、それから週末に千夜ちゃんを探しに行く。それを確認して、今日はお開きとなった。

水曜日の夜、いよいよ『まじゅつ』決行の日。どのようにやっているか見たいということ、リゼちゃんも同行していた。もちろんティッピーと、ティッピーを介してココアお姉さん（仮）もいる。

『今日は残業なしで定時で上がったよ！ そっちの私に心ゆくまで付き合うから！』

「なんだろう、まるでティッピーが喋っているような、ココアが腹話術ふくわじゅつを使っているような感じだな」

私とリゼちゃんとティッピーの一行は、街のはずれにある高台たかだいに向かっていた。

前回とは違う場所で『まじゅつ』を実行する理由をココアお姉さん（仮）に尋ねると、今日の条件ではそこが一番世界を接続しやすい場所になると観測できたかららしい。

私は前回同様、ぐるぐる巻きのステッキを持っていた。なんとこのステッキ、部屋で支度したくをしていたときに取り出すと、どういうわけか今回もぐるぐる巻きを突破して私のおなかを撃ち抜いてきたんだ。乙女を完全否定するひどい声を上げちゃって、リゼちゃんが不審者の声だと勘違いして、銃を構えつつ部屋に突入してきたのはここだけの話。事あるごとに私を攻撃してくるこのステッキは、何かあやしいパワーでも吸っちゃったのかもしれない。今度こそ暴発しないようにガチガチに、念入りにテーピングして固めた。

しばらく歩いて、高台に到着した。ここから眺める木組みの街はきらきら輝いていた。

「すごーい！ こんなに綺麗な場所があっただね！」

「ココアはここに来るのは初めてだったっけ。なかなかいい景色だろ？ 木組
みの街で一番眺めが良くて、デートスポットでもあるらしい」

「なるほどー。確かにそれっぽい人たちがわりといるね」

「そこではたと気付いた。これだけ他の人がいる中で、例の『じゅもん』を叫ぶのだろうか。」

「あの一、ココアお姉さん？ やっぱりアレを叫ばなきゃだめ？」

『うん。もちろん』

「えー、恥ずかしいよー……」

『そうだろうと思つて、ちゃんと準備はしといたよ。今から発動させるから』

「なにを？」

『もちろん、人払いの術！』

ココアお姉さん（仮）がそう言うと、手に抱いていたティツピーからかすかに何かの音が聴こえてきたような気がした。

「ココア、なんだかここにいづらい感じになつてきたんだが。その……なんと
いうか、ちよつと気分が悪くなつてきた」

「私も……」

『ちよつと我慢してね、モスキート音をカップルのそばでいい感じに響かせているから。ティツピーを移動させて二人に影響が出ないようにするから、ちよつとティツピーを離してね』

「う、うん」

モスキート音、確かお父さんが教えてくれた。なんでも、若い人に聴こえやすい音で、その場から遠ざかりたくなる音だとか何とか。それをティツピーを通じて発信しているのかな。

「あ、少し楽になってきた」

「ほんとだ」

ティップピーがぴよんぴよんはねて少し離れたところに行くと、私たちには何も聴こえなくなつた。その代わりに、少しずつまわりにいたカップルが立ち去り始めて、数分後には誰もいなくなつた。

『みんないなくなつたみたいだね。私の計算が合つててよかつた。人のいる場所だけにピンポイントで音波を届ける技だよ』

思つたよりもすごい技術だつたみたい。

いよいよ『まじゅつ』発動のとき。千夜ちゃんが残したメモを胸にあて、ポケットにしまう。そして街の光を目に焼きつけて閉じ、ステッキを構えた。

(千夜ちゃん、待つててね……)

「サイエンティフィックマジカルフュージョン！ 世界の扉よ、開け——！」

風がごう、と吹き抜けた。意識が世界全体に広がる感じがして、遠くに共鳴した。^{きょうめい}

「さっきの風はなんだ!? 何かぞわつとした」

『世界がつながった風だよ、リゼちゃん』

「うん。今この世界のあの街に、千夜ちゃんがいる」

「そうか……今すぐ会いに行きたいけど、急には動けないな」

「うん、週末までにいろいろ準備を整えて、それから千夜ちゃんを探しに行
いよう」

ラビットハウスに帰り、リゼちゃんとふたりでサキさんとタカヒロさんに頭

を下げた。

「急でごめんなさい！ 週末に大きな街にいる友達に会いに行きたいの！」

「私からもお願いします！」

「あらあら、突然ね。二人は高校生だから二人だけで旅行しても問題はなさそうだけど……ここからだいぶ離れてるのかしら？ あと、お泊まりなの？……どうかしら、タカヒロさん」

「そうだね。一般に高校生の女の子だけで泊まりがけの旅行に行くのは大変かもしれない」

「私がついていくのはどうかしら？ お店をお休みにして」

「……君のことは深く信頼しているけど、少し不安が残る。私も行きたいところだけど、少々人と会う用事があつて行けそうもない」

「ダメ、ですか……？」

「二人だけ、あるいはサキとの三人だけだと、賛成はできないかな。私が同行できる日か、あるいは誰か信頼できる人がいるといいけど」

やっぱり、女の子ふたりで泊まりがけの旅をしたいときなり言って、賛成してくれるはずがないよね。でも千夜ちゃんは探しに行きたい。行かなきゃ。

「あの、私のところから誰か同行できないか聞いてみます」

そう言うと、リゼちゃんは携帯電話を取り出してどこかに連絡し始めた。

「親父、お願いがあるんだけどさ。今週末、ココアと泊まりがけで旅行したい。突然ですまないけど——やっぱりダメか。その、誰かについて来てもらうの……それもダメ、わかった。突然すまなかった」

電話を切ったリゼちゃんは意気消沈いきしょうちんしていた。

「リゼ君のお父さんも同じ意見のようだね。ところで、あの街の中で、そのお友達の住んでいるところはわかつているのかい？」

「いえ、その……」

まだココアお姉さん（仮）も、千夜ちゃんの確実な居場所はつかめていないという。

「連絡先などは？」

「……わかりません」

「そうか……それだとちよつと探すのは難しいね」

タカヒロさんの言葉は優しかった。でもその言葉で忘れかけていた現実を突きつけられた。やみくもに動いても千夜ちゃんを見つけたすことはできない。千夜ちゃんと再会できるための準備が週末までにはできそうになかった。

「……わかりました……」

「もし何か手掛かりを思い出したら教えてほしい。私のついでで少したどれるかもしれないから」

部屋に戻り、先にお風呂に入った。湯船につかり、どうにかして千夜ちゃんを見つけたことができないかを考えたけど、ココアお姉さん（仮）の情報を待つしかなかった。

それから一週間、私たちの方では何も手掛かりは得られなかった。

金曜日、学校から帰ってくると青山さんがサキさんと話していた。

「あら、ココアさんお帰りなさい。ちよつとご相談があるんですが、よろしいでしょうか？」

「なんですか？」

私が首をかしげつつも青山さんのところに行くのと、

「ココアさんを一泊二日取材ツアーのアシスタントに任命したいんです」

「えっ!？」

「私と凜ちゃんて取材旅行に行くんですけど、ちよつと深い事情がありました。一泊二日で急いで行かないといけなくなっちゃいました。そこで、手分けして写真を撮ってくれる方を募集したいなと思って、ふとココアさんのことが思い浮かんだんです。」

「あの、どこまで行くんですか？」

「私がいたことのある大きな街です。百の橋と輝きの都。」

「ほんと!？」

思わず身を乗り出したせいで、青山さんとおでこをぶつつかしてしまつた。隣にいたサキさんが苦笑しながら、

「まだタカヒロさんには話していませんけど、ココアちゃんと青山さんと凜さんなら、私は行ってきていいと思うわ。リゼさんはご家族の許しが出ないと

いけないけど」

タカヒロさんはもうすぐ帰ってくるらしい。思わず舞い込んできた話に嬉しくなつて、今すぐにもリゼちゃんを呼びに行きたかつた。でも今日は部活動の助っ人で遅くなるとかなんとか。リゼちゃんもタカヒロさんも早く帰つてこないかなとわくわくして、今日のお仕事はいつも以上に楽しく、ちよっぴりそわそわしながらやり遂げた。

バータイムが始まる少し前のころ帰ってきたタカヒロさんに、まず青山さんが話をした。

「タカヒロさん、ココアさんを私にください！」

まるでお付き合いの許しをもらうような切り出し方に、サキさんと私は思わず目を見合わせた。

「突然刺激的な挨拶だね、青山君。やはりこういう時のキメ台詞はこれかな？」

『青山君に娘はやれん』

「そんな、私にはココアさんが必要なんです」

「まあ、とりあえず話を聞きたいから、ちよつと待つててくれないか」

タカヒロさんが奥に引つ込み、それからほどなくしてパーティタイムの制服で現れた。カウンターの方に集まり、青山さんが今回の話の趣旨しゆしを伝えた。アシスタントとして私を雇い、一泊二日で取材旅行をしたいということ。それを聞いたタカヒロさんは少し考え、口を開いた。

「青山君と凛君だと護衛ごゑいの面で少し不安なところがあるから、みんなで行こうと思う。私の予定を変更することにして、サキは大丈夫かな？」

「大丈夫よ！」

「いいんですか！」

タカヒロさんは笑みを浮かべてうなずいてくれた。

それからほどなくして帰ってきたリゼちゃんに話を伝え、リゼちゃんが急いでお父さんに連絡を取った。リゼちゃんのお父さんも、タカヒロさんが同行するならとお許しをくれた。

みんなのスケジュールを確認し、ここから大きな街まではかなり時間がかかることから、来週金曜日の夕方、私とリゼちゃんの学校が終わり次第電車に乗って、金曜日夜と土曜日夜に泊まる二泊三日の旅行にしようということになった。最初の予定より一週間遅くなったけど、千夜ちゃんを探しに行けることになった嬉しさに興奮して、もう今すぐにでも荷造りをしたくなった。

翌土曜日の夜、リゼちゃんと夕食を食べていると、ダイニングの片隅にティップピーがやって来て、ぴよこんぴよこん飛びはね始めた。

『こんばんは、木組みの街の私とリゼちゃん！ 千夜ちゃんの詳しい居場所が

わかったよ！』

「ほんと!？」

私とりゼちゃんと思わず立ち上がり、スプーンが床に落ちた。

『あ、ごめん。まだ食事中だったね。ティップピーを介してまわりに他の人がいないかどうかまでは探知したけど、そつちの様子までは見てなかったよ』

ゆつくりいいよ、とココアお姉さん(仮)は言ったけれど、気になって仕方がないので急いで食べ、急いで食器を片付け、そして私の部屋に集合した。

ココアお姉さん(仮)は私のスマートフォン地図に、向こうの技術力を使った遠隔操作で赤い点を表示させ、くるくると動かした。

『まず、千夜ちゃんの家はここ。街から少し離れたところの住宅地だね。千夜ちゃんはここからトラムで街の高校に通っていて、今この時点で一年生』

「ふむふむ。ということとは、私がいた“Kigumi-F”の世界と同じ時間にいると
いうこと？」

『察しがいいね。まだそのあたりは十分に説明していないけれど、その通り。
さすが私！』

時空がかかわってくる問題は頭が痛くなるけれど、なんとか頭を使って理解
したい。

「どうやって会ったらよさそう？ 待ち伏せ？」

『うーん、どうも千夜ちゃんが通う高校は土曜日午前中にも授業があっている
みたい。だからその帰りを待つといいかも』

「千夜もこつちで友達がいるだろ。そこにいきなり知らない奴が二人も現れた
ら千夜だけじゃなくて友達からも怪しまれないか？」

『そこはリゼちゃん一流の尾行術びこうじゆつで一人になるまで追って、それから声を掛け

るのはどうかかな？」

「いや、私は尾行をまく術は習得しているけど、自分が尾行する方になったこととはないからな……」

「はいっ！ 私尾行得意です！」

前、千夜ちゃんと一緒になつてチノちゃんとメグちゃんを追いかけたことがあるもんね。

『それはないね。私のことを自分で悪く言うところちもへこんじゃうど、どの世界の私も尾行は下手だったから』

「説得力のある否定をされちゃった……」

『それはさておき、千夜ちゃんを追うための情報はこれで揃ったね。あとは頑張ろう！』

私の落胆らくたんはさらりと流され、気合を入れる場面に移ってしまった。

「おーっ！」

「お、おーっ」

『あ、そうだリゼちゃん。間違ってもそっちの私にしたみたいにもデルガン突きつけて脅おどしたりしないでね』

「もうやらないよそれは……」

リゼちゃんが目に見えてしょげてしまったので、向こうの私の代わりによしよししてあげた。

「そうだ、質問いいか？」

『はいリゼちゃん！』

「世界の接続がどうこうという話なんだが、もし繋つないだ先の世界が時間がずれているとしたら、そのときはどうやって本当の元の世界の元の時間に戻すんだ？」

『リゼちゃんも察しがいいね。確かに、世界の接続魔術はある程度までのすり合わせはしてくれるけど、今のそつちの私とリゼちゃんが、私の方が本当の年齢より一年分歳を取っちゃってて、二人の中身が同じ年になってしまっているみたい。みんなの年齢がバラバラになってしまっているみたい。みんなに出会ったあと、最終的に世界の整合を取るために科学と魔術の融合術ゆうごうを使う必要があるんだ。詳しくはまたその時に』

「なんかまだよくわからないけど、ひとまず覚えておくよ」
作戦立案完了。 決行まであと一週間。

待ち遠しかった金曜日、学校が終わるやいなや、友達とのあいさつもそこそこラビットハウスまで急いで帰り、制服からお出かけ用の服に着替えた。荷造りは万全。同じくらいに帰ってきたリゼちゃんもすぐに集まり、先に準備が

できて待つていてくれたサキさんとタカヒロさんとともに駅に向かって出発した。もちろんお店のドアに「週末臨時休業」の札を忘れずにかけた。

駅にはすでに青山さんと凜ちゃんさんが来ていた。

「今日はお付き合いくださりありがとうございます。ちょうど六人なのでコンパートメント一室を確保しました。」

金曜日の夕方ともあって、駅はとても賑にぎやかだった。到着がだいぶ遅いので、電車の中でお弁当を食べることにしていた。そのお弁当はサキさんとタカヒロさんが六人前仕込んでくれていた。指定された席に座ると、まもなく電車が動き出した。木組みの街がゆっくりと遠ざかっていく。

千夜ちゃんの居場所の候補はココアお姉さん（仮）から伝えられている。取材をしつつ千夜ちゃんに会い、少なくとも連絡先の交換はしておきたい。できれば記憶を取り戻してもらえるといいけど、リゼちゃんの例によると、それに

は時間がかかりそうだった。

すつかり日が暮れているため車窓は真つ暗で、時々街を通り過ぎるときに明るくなるほかは、月明かりだけが見えていた。出発してから二時間くらい経つた夜七時頃にお弁当タイム。旅行のときのご飯はおいしさが百倍になる気がする。

「ところで青山さん、どうして取材旅行が二泊三日の大急ぎモードになったの？」

「それは私から説明します。翠みどりちや……青山先生の雑誌連載があるんですが、別の原稿が少しずつ遅れていった結果、締切が二つ見事に重なってしまいましたして」

「ちよつと日付を間違えてしまいました……しよんぼり」

沈痛ちんつうな面持おもちの青山さんと凜ちゃんさんに大いに同情した。締切が重なると

つらいよね。課題がどちらも片付かないし。

「スケジュール管理と調整がきちんとできていなかったのは私の責任でもありません。本来なら取材旅行をしている場合ではありませんし、場合によっては連載を一号分休載きゅうざいすることも考えましたが——」

「読んでくださる読者のみなさんのために、どうしても現地に行つて調べて、そして書かなければならないのです。えへん」

青山さんが顔を上げてきりつとした表情を作り、さりげなく私の方に目配せしてきた。もしかして、千夜ちゃんを探そうとしていることをサキさんか誰かから聞いたのかな。青山さんの隣にいたサキさんの方に目をやると、陰でこっそりピースサインをしていた。思わずテーブル越しに青山さんとサキさんに抱きつきたくなつたけど、我慢、我慢。

「今回の記事は街歩きです。ココアさんとリゼさんには街のスナックを撮つ

てもらいたいと思います」

「どんな写真を撮るといいんですか？」

リゼちゃんの質問に凜ちゃんさんが答えた。

「街のスナップ特集ページに採用することを考えています。もちろん撮影者としてココアさんやリゼさんの名前をクレジットします。もし名前を伏せたいという場合は、ニックネーム等にもすることも可能です」

「何枚くらい撮ればいいかな？」

「そうですね、できる限り多くお願いします。実際に採用できるのは十数枚程度ですが、掲載けいさいできる条件を考えながら選択していくので、候補が百枚くらい、欲を言えばそれ以上あつたほうが嬉しいですよ」

「わかりました！ がんばります！」

街の地図を広げて、街に住んでいたことがある達人の青山さんアドバイスの

もと、よい写真が撮れそうなエリアを教えてもらった。もちろんそれ以外の街中でも風景を撮ってほしいとのことだった。

作戦会議を終え、一息ついたらリラックスでき、心地良い揺れに誘われるように眠りに落ちていたらしい。気がついたら窓の外が明るくなっていて、電車は終点に向けて減速しているところだった。

電車が駅に着いてから、ホテルまではトラムで移動する。トラムはとてもお客さんが多くぎゅうぎゅう詰めだったので、ぺちゃんこになりそうだった。ホテル近くの停留所まで十数分、トラムはゆっくりと進んでいく。窓の外にはきれいな夜景が広がっていた。写真に撮るときれいだろうな。

街の中心部から少し離れたあたりに来て、外の人通りも車内も落ち着いてきた。席に座って改めて外を眺めたら、ふと高校生らしい女の子の集団が通り過ぎるのが見えた。

「あれっ？」

「？ どうしたココア？」

「なんかさつき千夜ちゃんとすれ違ったような……」

見た感じの姿が千夜ちゃんそっくりの子が集団の中にいたように見えた。一瞬だったので本当に千夜ちゃんだったかどうかまではわからなかった。

「千夜がこのあたりにいたとしてもおかしくはないけど、でも夜遅い気もするしな……どうする？ ترامを降りて追いかけるか？」

「そうし……、あつ、見失っちゃった」

目を離さないようにしていたけど、対向のトラムに一瞬視界を遮さへぎられた隙すきにその女の子達の集団はどこかに行ってしまった。

「仕方がない。予定通り、明日午前中に千夜が通う高校に張り込むというこ
とで」

「うん」

ホテルの最寄りに到着。トラムを降りて少し歩き、とてもきらびやかなホテルの前に着いた。でもこっちのホテルじゃないんだよね。

「はい、みなさまをご案内するホテルはこちらです」

「あら、趣おもむきあるホテルね♪」

「記憶にある姿よりはだいぶ明るいけど、でもまだホラーテイストがあるな……」

「あるね……」

ホテル・ロイヤルキャッツ。私とりげちゃんちゃんの記憶にある姿からは少し変わっているけど、今回も刺激的なホテル体験ができそうだった。

「青山様。みなさま。お待ちしております」

「お久しぶりです」

ホテルの支配人さん姉妹が相変わらずの雰囲気を出迎えてくれた。部屋割り
は私とりぜちゃん、タカヒロさんとサキさん、青山さんと凜ちゃんさんで計三
部屋を二人ずつ使う。ご飯は電車の中で食べたし、夜ももう遅いのでお風呂に
入って寝るだけ。

「このホテルにまた来るとは思わなかったな」

「そうだね」

「またみんなで楽しく旅行できるように、早くみんなを取り戻して一緒になり
たいな」

「うん。まずは千夜ちゃんに会おう」

「だな。明日絶対に、千夜をつかまえて仲良くなる」

「いよいよ明日。リゼちゃんの言う通り、千夜ちゃんに絶対に会って仲良くな
る。これが一番大事だった。朝から高校あたりに張り込む必要があるので、今

日はもう寝ることにした。

翌朝。ホテルで優雅な朝食を楽しみ、大仕事に備える。ホテル特製のふわふわもちもちなクロワッサンとブルで元氣いっぱいになった。

「もちもちしてておいしい！ ライバルとして不足なし！ 負けないように修行しなきゃ！」

「ココアのパンもかなりおいしいと思うけどな」

「ううん、まだまだ。あきらめたらそこで試合終了だよ！ 一流への道は険しいんだから！」

「今日は熱血ココアだ!？」

「そう、この熱く燃えるパッションで千夜ちゃんを見つけてハートを射貫いて、私達のものにするのが目標です！」

「情熱的な愛だな……」

「さありゼちゃん、一息ついたら出かけるよ」

ちようど席を立つて部屋に戻ろうとしたとき、青山さんがとことこと歩いてきた。

「おはようございます。ココアさんとリゼさんは早いですね」

「おはよう青山さん！」

「おはようございます」

なんだかとても眠そう。いつもに増してふらふらした感じだったので尋ねてみると、

「創作の神様がふわっと私のもとに降臨こうりんしまして、あふれ出る言葉を必死になつて書き留めていたら朝になつていました」

実は寝てないんです、そう言った青山さんの後ろから、これまた眠そうなの

凜ちゃんさんが歩いてきた。

「翠ちゃん、朝食を食べたら取材に行きますよ〜ふわああ〜」

「ええ〜ちよつとゆつくり〜」

この感じだと、今日の青山さんと凜ちゃんさんは取材活動できなさそうな気がした。その分私とりぜちゃんて頑張ろう。うん。

部屋に戻って身支度をして、爽さわやかな晴れ空の下、取材兼千夜ちゃん探しに出発した。

写真を撮るだけ多く、目安として百枚は欲しいとお達しだったので、ピント来たものはなんでも撮っていくことにした。ホテルのすぐ前にあった大きな銅像、ちようどやってきたトラム、街にたくさんあるという橋のうち最初に通りかかった立派な橋など、本当に三歩歩いては撮るのを繰り返した。小さい赤ちゃん連れを見かけた時は、そのご家族に声をかけて、一家で休日を楽しむ

姿を撮らせてもらった。

いろいろ巡っていくと、ちょうど昼前に千夜ちゃんを通うという高校の前にたどりついた。まだ校門のあたりは静かで、土曜午前中の授業はまだ終わっていないみたいだった。

「ここが千夜の通う高校か……どちらかと言うと、私やシャロが通う高校の方に似た感じだな」

「そうだねー、とてもおしゃれな感じ。この世界の今の千夜ちゃんは、私たちの千夜ちゃんよりもっとお嬢様っぽいのかな」

脳裏に、いつか王様ゲームをしたときの千夜ちゃんが思い浮かんだ。その姿からよりお嬢様っぽくするとどうなるだろう。

『くるしゅうないぞ。そなた、ココアと申すか。おもて面を上げい♪』

『はーっ』

……私の想像力ではあまりお嬢様っぽくできなかった。

ずっと校門の前に立っていると怪しまれそうだったので、ちょうど目の前にあった喫茶店に入り、レモネードを飲みながら待つことにした。とても爽さわやかな味で、夏場だともっと美味しく感じられるに違いない。

「こつちの千夜の暮らしてどんな感じなんだろうな」

「うーん、千夜ちゃんのことだから友達は多そうだよね」

「そうだな」

私が初めて木組みの街に来て、入学式の日を一日早く間違えて街で迷子になつていたときに、たまたま出会ったのが千夜ちゃんだった。あの時はようか
んを丸ごと一本ごちそうになりつつ楽しく話げできた。

その後勘違いで街じゆうを走り回らせてへろへろにしまったのは今でも
申し訳なく思っている。おっとりして何でも受け入れてくれる千夜ちゃんのこと

とだから、仲良しの子も多いだろうし、慕^{した}う子だっているに違いない。でもその中に、今のところ私達は入っていない。ちよつと寂しいけど、きつとすぐに思い出してくれるから大丈夫。

「——コア、ココア」

「え？ あ、はい！ 元氣です！」

「突然寂しそうな顔をして固まったからどうしたのかと思ったよ」

「うん、ちよつと千夜ちゃんとの思い出をかみしめてた」

「思い出、か。その思い出を千夜にも思い出してもらわないとな」

「うん」

「ところで、千夜が学校から出てきたあと、どのタイミングで声をかけようか？ 千夜が一人のときにするか？」

「そうだねー……こつちの友達がいる状態でいきなり二人で押しかけてナンパ

したら変な気がするよね」

千夜ちゃんが一人になったときに声をかけることにして、校門の方をちらりと見た。ちょうどチャイムが鳴り、生徒が三々五々出てきたところだった。しばらく待っている、千夜ちゃんとそのお友達三人が一緒に外に出てきた。

「お、出てきたな。尾行しよう」

リゼちゃんが立ち上がり、その後を追うようにして私も尾行を始めた。

しばらく千夜ちゃんたちの後を追ひ、お友達が一人、また一人と別れていつて、トラムの停留所の前あたりで千夜ちゃん一人になった。そつと近づいて横顔をさりげなく見ると、曇った感じがした。

千夜ちゃんが空を見上げてため息をついたところで声を掛けた。

「こんにちは、ちよつとアンニユイな雰囲気のお姉さん♪」

「私たちが良ければ話を聞くぞ？」

陰っていた顔が向けられたのは一瞬で、すぐに今までよく見慣れた感じの明るい顔になった。

「あら、これってナンパかしら？ それとも勧誘かしら〜？」

「ナンパです！」

「そうなの……なぜか初めて会ったような気がしないし、ちよつとお付き合ひしようかしら」

「よろしく！」

断られるかと思つて二重三重に対策しておいたけど、その心配はなかつたようだった。三人で連れ立って公園に行き、ベンチに並んで腰かけた。リゼちゃん三人分の飲み物を買つてきてくれた。

「ナンパしたほうから名乗るのがマナーだね！ 私はココアって言います！ちよつとした旅行でこの街に来ました！」

「リゼだ。ココアに誘われて一緒に来た」

「ご旅行なのね。私は千夜つて言います。この街にずっと住んでいるけど、もうすぐお引越しなの」

「アンニユイな雰囲気なのはそのせい？」

「あら、わかっちゃった？ ……そうね、やっぱり慣れ親しんだ街と離れるのは寂しいし、お友達と離ればなれになるのもつらいわね……」

千夜ちゃんは不安そうな面持ちで飲み物の缶をぎゅつ、と握っていた。

「そつかり、ちなみにどこにお引越し？」

「ここから電車で何時間か行ったところで、たしか木組みの家と石畳の街……つて言うところよ」

「すごい！ 実は私たち、その街から来たんだ！」

「まあ！」

それからひとしきり木組みの街の話で盛り上がった。私たちのもとの世界の通り、「甘兔庵」あまうさあんが千夜ちゃんのおばあちゃんの家になっていているらしい。

「私の祖母と父が和菓子職人で、今までは甘兔庵は祖母だけで仕事をしていただけけど、父が甘兔庵で和菓子作りをすることになったの。母が世界中を飛び回るお仕事だから、私がこの街で一人暮らしになっちゃって危ないからって、それで私が転校することになったのよね」

千夜ちゃんのお母さん・千鳥さんはとても忙しそうなお人だった。千夜ちゃんのお父さんにはまだ会ったことがない。もとの世界ではシャロちゃんが一人暮らしをしていたけど、あれは千夜ちゃんという大きな支えがあつてこそのこと。今のこの世界にはまだシャロちゃんがいらない。おばあちゃんと一緒とはいえ、知り合いがいないとひと独りだと感じることも多いに違いない。

「それでね、やつぱり不安になっちゃうの。新学期が始まってしばらく経って

からの中途半端な時期の転校でしょ？　ずっと一緒だったお友達と離れるのも心細くて……新しいお友達もできるかどうかわからないし」

その言葉に少しだけ、寂しさを覚えた。この千夜ちゃんはまだ思い出していない。今日の前にいる二人もずっと一緒の友達なのだということ。

「ここから木組みの街も遠いしな……、やっぱり、手紙とかメールとか、メッセージとかを送り合うのがいいんじゃないかな？」

「それがいいと思うよ！　私も遠い別の街から木組みの街に来ただけど、住んでいた街のみんなとよく手紙のやり取りをしてるんだ！」

リゼちゃんと私の提案に、千夜ちゃんは少し明るい顔になった。

「そうね！　それがいいかも」

「そうしよう！　そしてね、木組みの街でもお友達をいっぱい増やそう！　私達がその第一号だよ！」

「まあ！ 早速お友達ができて嬉しいわ！ えっと、ココア……ちゃんと呼んでいいかしら」

「もちろん！」

「私も気軽にリゼと呼んでくれていいぞ」

「ありがとうココアちゃん、リゼちゃん」

気がつくともう午後一時を過ぎていた。ずいぶん話し込んでいたみたい。

「おなかすいてきちゃった。そうだ、千夜ちゃんこのあたりで美味しいお店知ってる？」

「ええ、案内するわ。一緒にしてもいいかしら？」

「もちろん！」

千夜ちゃんの案内で、学生さんのお財布にやさしくとても美味しいお店に行き、ランチと一緒に食べた。メインのパスタ料理はもちろんのこと、食後の

デザートとして出されたケーキとハーブティーが最高だった。これは負けていけない。帰ったらラビットハウスのメニューに加えられるといいな。

木組みの街でまた会おうと手を振って別れ、目標達成（みつしよんこんぷりーと）！

「千夜ちゃん笑顔になってくれて良かった！ 早く木組みの街でも会いたいな
」

「そうだな。いつくらいに引っ越してくるんだろう？」

「来週だったりして！」

「さすがにそんなに早いなんてことはないだろ」

「それもそっか、へへへ」

別れてから、メッセージを送り合えるよう連絡先を交換しておけばよかった

かな、と思った。そしたら今から木組みの街に来るまでの間にもいっぱいおしゃべりできたのに。でも、直接会えるのを待つのもいいかもしれない。また会えたときに話すことがいっぱいできるから。

ここからは青山さん依頼のお仕事の続き。朝、ホテルで見た時は青山さんと凜ちゃんさんがどちらもとても眠そうだったけど、取材活動は無事できているのかな。ちよつとメッセージを送って聞いてみよう。

『そつちはどうですか？』

もしあの後寝ちゃってたら、たぶん返事は来ないかもしれないな。そう思った瞬間、返信があった。

『……たいへんいまおきました』

やっぱり。

『なにか追加でお手伝いできることあるかな？』

『ごめんなさい。でしたら「青山はらぺこマウンテン」の連載記事のために一軒アポを取ってあるんですが、そちらのお店の様子の写真は確実に撮っていたみたいです。お店には連絡しておきます』

『わかった！ お姉ちゃんにまかせなさい！』

『ありがとうココアお姉ちゃん！』

凜ちゃんさんはまだ半分寝てるみたい。お姉ちゃんと呼ばれるのはもちろん嬉しいんだけど、この返信の表現は凜ちゃんさんのキャラじゃなさそうな気がした。その返信からほどなくして、お店の場所の住所と地図が送られてきた。

「リゼちゃんリゼちゃん」

「グループメッセージで確認した。さあ行こう」

さすがリゼちゃん、情報の把握が素早い。

お店までは街中を歩いて十分ほどの道のりだった。お店に行って青山さんの

名前を出すと、店長さんに取り次いでくれた。店長さんは若い女性で、青山さんの熱心なファンらしい。

「青山さんにご紹介いただけるなんて最高の幸せです！取材のご依頼を頂いたときに、以前来た時にとっても良かったので、今度は正式な取材で訪問したいと仰つていただけました。その時は青山さんだと気づけなくて……」

「まあ、青山さんは自然な感じでとけ込んでいるし……たぶん気がつかないかもしれないな」

「私は超一流のココアアンテナでたちどころに青山さんを発見できます！」

アンテナ、とたとえるのが正しいかどうかはわからないけど、青山さんいなかナー、と思うと、なぜかすぐに青山さんに出会えちゃうんだ。むしろ引き寄せ合うテレパシーなのかな。もしかしたら、その力でみんなを探しだせているのかもしれない。

「なるほど。ではそのココアアンテナで、青山さんと凜さんがどこまで来ているかわかるか？」

「うーん、このあとすぐ来るよ」

「本当か？」

青山さんと凜ちゃんさんのことを思い浮かべると、すぐ近くにいるように感じられた。これが予感というものかもしれない。果たして、それから一分もたないうちにお店のドアが開いた。

「はあっ……はあっ……お待たせして大変申し訳ありません！ 本日取材させていただきます真手凜まてりんと申しますっ。青山もまもなく参ります！」

「本当に来た。ココアアンテナすごいな」

「でしよう？」

自分でもちよっぴり驚いているけど内緒。その後、顔が青ざめた青山さんが

ふらふらと現れ、取材の前に店長さんに介抱かいほうされる羽目はめになった。

青山さんご指名のメニューは、お店特製のロールケーキセットだった。せつかくなので私達も同じメニューを頂くことにした。店長さんがオーダーを直接受け、自ら持ってきてくれたセットが四つ、まず近くの机に置かれた。

「では、写真の構図として、事前に打ち合わせた通り、青山がひとりで座っているパターンと、こちら二人のモデルが同席しているパターンと、二つ撮らせていただきますと思います」

「私達モデルさんだつて」

「ちよつと照れくさいな」

雑誌に載っている私達の姿を想像してちよつと恥ずかしくなっている時に、ふと思ひ浮かんだことがあったので聞いてみた。

「ねえ凛ちゃんさん、普通こういう撮影って、プロのカメラマンさんが撮った

りするんだよね？」

「はい。いわゆる雑誌に大きく載せる写真は、プロの腕とプロの機材で撮ってもらいます。この街でも弊社と契約している会社がありまして、そちらに無理を言つて急ぎ派遣していただきました。間もなく来ます」

ほどなくして、撮影スタッフの方が二名来て、青山さんがロールケーキセットの前に座っている写真、私達と三人一緒に写っている写真、ロールケーキセットの写真を手早く撮影した。

「改めまして、青山と申します。このたびは取材をご快諾かいだくいただきましたましてありがとうございます。まず一口いただいてもよろしいでしょうか」

「え、ええ！ 是非とも！ お口に合えば良いのですが！」

なんか青山さんがいつもと違ってカクカクしているような気がしたが、ケーキを一口食べた瞬間、雰囲気がいいつも通りのふわふわにやふにやな感じに戻

り、表情もすっかり緩ゆるんでいた。

「あゝおいしいです〜」

「（翠みどりちゃん、地じ、地じが出てる！ シャキつとして訪問したいって言ったの翠ちゃんでしょ!?!）」

丸くなつて溶けてしまいそうな青山さんに、凜ちゃんさんが何かを耳打ちしていたけれど、当の青山さんに止められた。

「それはやめにしました〜、今までで最高のお店、スイーツ、パティシエールには最高の礼を尽くさねばと思っていました〜、これを前にしたらもうほわーつとなるしかありません〜」

「どうやら、さっきのカクカクした感じは青山さんが考えてやっていたことだったらしい。それを取り去ってしまうほどのおいしさ。とても気になる。」

「ココアさん、リゼさん、凜ちゃんさんどうぞ〜」

「やっと食べられるよー！ いただきます！」

一口食べた瞬間、私もほわほわふにやふにや、温かい気持ちになった。豊かな玉子の風味に、確かな力を持った、でもしつこすぎずに重なるクリームの甘さの相乗効果で、世界を変える力があつた……なんて三つ星シェフのコメントめいた言葉が一瞬思い浮かんだけれどそのまま流した。言葉で表現しつつも、その言葉をしまい込んでこう表すのが一番正しい。

「おいしい！」

その声は、私、リゼちゃん、凜ちゃんさんの三人分が重なったものだった。

「そうでしょう〜」

その横でニコニコしながらうなづく青山さん。店長さんの方を見ると、なんと涙を流していた。

「うっ……す、すみません。青山さんや皆様にそう言っていただけで、とても

嬉しいですよ……」

店長さんが語るには、長い修行と大きめの店でのさらなる経験を得てようやく独立し、お店がまだ大変で心が折れそうになっていた時期に青山さんからの取材の依頼を受けて、夢のような気持ちになるとともに、そのおかげで困難を乗り切ってここまで来ることができたらしい。

「いい話だな……」

リゼちゃんももらい泣きしていた。

「さあ、食べましょー」

青山さんに促され^{うなが}、続きを食べ始めた。その美味しさに身も心も満たされ、とても幸せな気持ちになった。食べ終わってまた感想を伝えると、感極^{かんきわ}まった店長さんがお代わりとして追加で一本持つてこようとしたので慌てて止めた。

ケーキを頂いた後、コーヒーを飲みながら取材の続きが始まった。店長さ

ん、青山さん、私達の四人による座談会みたいな形にするらしい。司会は凜ちゃんさん。

「それでは改めまして、このたびは弊社雑誌企画『青山はらぺこマウンテン』の取材をご快諾いただきましてありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします」

「よろしくお願いいたします」

「いえ！こちらこそ当店をお選びいただきましてありがとうございますました！」

座談会は、先ほど店長さんが話してくれた修行時代の話や、お店が軌道に乗るまでの話、青山さんがこのお店を見つけるまでの話と、話題に事欠かなかった。

「私がこのお店を見つけたのは、つい二か月ほど前、この街に久しぶりに帰っ

てきたときのことでした。今は木組みの街に住んでいますけど、家はこちらにもありません」

「は、はい、存じております！ 先生の本の略歴のところと、出版社の作家プロフィールで見ました！ この街を出店先しゅつてんさきに選んだのも、少しでも青山先生の過ごした街を体験したいとの思いもあつて……」

「すごい！ パティシエールとしての腕を磨いて、憧れあこがの街にお店を出すなんて！ 私もパン屋さんを憧れの街で開きたいな」

とても頑張つて、そして自分の夢や願いを少しずつ叶えていく。私も、店長さんみたいに頑張りたい。店長さんだけじゃない、甘兎庵を切り盛りする千夜ちゃんや、ラビットハウスを支えるチノちゃんみたいに――。

「ココア、どうした？ 突然固まつて」

「あ、ごめんなさい！ 未来を想像していたらちよつとそつちに飛んでいっ

ちゃつてた、えへへ」

「未来ですわね、私も未来を想像しているといつの間にか時間が経っちゃつてまして、夕陽ゆうひに照らされていることがあります」

「あはは……」

リゼちゃんと店長さんに呆あきれられちゃったかもしれない。そして凜ちゃんさんは遠い目をしていた。こうして原稿が遅れて凜ちゃんさんが走ることになるのかなと思った。

チノちゃんにつながる手がかりはまだ見つけられていない。おそらく、この世界ではない別の世界にいるに違いなくて、その世界を見つけたら、私の力で今の世界とその世界をつないで、一刻も早くチノちゃんに会いたい。もちろんみんなにも。リゼちゃんに続いて千夜ちゃんを見つけたけれど、シャロちゃん、マヤちゃん、メグちゃんはまだわからない。

「——私の両親は会社員でして、いわゆる職人の世界とはあまり縁がない感じでした。私が本気でパティシエールを目指す決めて打ち明けた時、私には応援の言葉をくれましたけど、後から聞いたら夫婦と弟の三人で家族会議を開いていたそうです。でもその中身がおかしいんですよ、最初は私が夢を叶えられなかった時の人生計画案を真面目に考えていたらしいんですけど、いつの間にか『娘が独立して店を構えた時の宣伝計画』なんて考えだしちゃって、自社のプロジェクトを勝手に立てようとしていたみたいです」

「うふふ、熱心に応援してくださいさるいい親御さんと弟さんですね」

「はい！ 弟なんかは普段はこちらにほとんど興味を示さないんですけど、この時は『……姉ちゃん、将来どんな店作りたい？』って聞いてきたんです。私が『みんなを喜ばせるだけでなく、ある人の印象に強く残るような、そんなものも提供できるようなお店を作りたい』って言ったたら、『……応援してる』っ

て。家族からの何気ない応援って、すごく力になるんだとあの時思いました」

私が木組みの街に来る時も、お母さんやお姉ちゃんはとても応援してくれました。お姉ちゃんも私が別の街に行くのと知ってとても落ち込んでいたみたいだけれど。

「やはり、一緒にいる人からの応援って、なんだか力が違いますよね」

「時には、応援の言葉が直接はなくても、ただ横にいるだけで何物にも代えがたい最高の応援になることもありますし」

ただ横にいるだけでも応援になる。私にとつてのチノちゃんがまさにそのような存在だった。私がチノちゃんを取り戻そうとする思いの半分は、私が自身を支えるための存在を求めているのかもしれない。この少し後ろめたい思いが打ち消されるとしたら、チノちゃんにとつて私がそうである時かもしれない。そうであつたらいい。そうであつてほしい。

その後、こだわりの素材の話や、将来像の話などをして、一時間ほどの座談会はお開きとなった。その後、私とリゼちゃんが店内や外のスナップを撮り、お暇いとました。取材の時間中はお店を貸し切りにしてあって、その後通常営業となるので、外の方にはちよつとした行列ができていた。

凜ちゃんさんは写真撮影をしてくれた会社に行つて打ち合わせをするらしく、ここで一旦お別れとなった。後には青山さん、リゼちゃん、私。現状について、青山さんと話をしてまとめておきたいことがある。すると、ちょうど青山さんの方から話を切り出してくれた。

「さて、凜ちゃんがお仕事だそうなので、私は暇ひまになりました」

「え？ いや原稿は」

そう言いかけたリゼちゃんの口に人差し指を当ててしーっ、とやり、「ココアさんと、少し不思議なおはなしをしたい気分です」

少し場所を変えましょうか。そう言つて青山さんは微笑んだ。

少し歩いて別のカフェに移動し、小さめのジュースを頼んで席についた。

「ココアさん、お目あての方には出逢あえましたか？」

「うん！　すぐに見つけられたよ。そして早速仲良くなっちゃった！」

「確かにあつという間だったな」

「そうですから、それはなによりです」

青山さんがぼわぼわとした笑顔で一緒に喜んでくれた。

「その方もココアさんのお友達、お仲間ということなんですよね？」

「うん。私の同級生。元の世界では木組みの街を歩いていた時に出会つて、羊よう

羹かんをご馳走ちそうになつたんだ」

青山さんに、元の世界での千夜ちゃんとの思い出をかいつまんで話した。

話しているうちに、忘れていたことがさらにいろいろ思い出されて懐かしくなった。

「なるほど。木組みの街で一緒だった方が、違う世界では他の街にいたとなると、これからさらに他の方を探すのもちよつと大変かもしれないね」

「そうなんだよね……。もしここよりもちよつと離れた場所だったら、その場所に旅行するのも大変だし……」

「こういう時は高校生という立場がちよつとつらいな。大学生だとこういう時に自由に行き来できるんだらうか」

「そうですね、大学生ですと結構自由が効きますね……。……。お財布がどっかんしない限り……」

「青山さんしつかり！ 魂が抜けちゃってる！」

「うふふ」

気付かけ薬代わりにエスプレッソを用意してもらって青山さんに飲ませ、この世に無事帰還させることに成功した。

「今回の事象で起きている問題のうち、空間的問題が、このような感じでみんなが遠く離れた場所にいる可能性がある、というものだとしたら、もうひとつの問題、時間的な問題もまた重要だと思われまます」

「時間的な問題？」

「はい。以前ココアさんが話してくださいましたが、並行世界の時間は必ずしも一致していないようです。ちなみに、ココアさんとリゼさんとの間には、時間のずれはありませんか？」

「あった。元の世界では私とココアが一歳違いで、私の方が学年も一つ上だったんだが、今はココアが一歳上がったから同い年になってる」

「そうだった。私の体感としてはリゼちゃんと同じ十八歳だけど、この世界では高校一年生で、十六歳みたい」

「改めて考えるとだいぶややこしいな」

「うん。……となると、千夜ちゃんとの時間のずれはどのくらいになるのかな？」

「そういえば千夜が何年生だったか聞くの忘れてたな」

「今度会った時に聞いてみよっか」

私達の話聞きながら、青山さんは手元にあつた原稿用紙にいろいろ図を描いていた。

「……なるほど」

「青山さん何か分かったんですか!？」

「今回の問題は少々難しいですね。時間が錯綜さくそうしています。この先に出会ってみ

なさんの年齢の差が二、三歳程度ならわかりやすいのですが、もしかしたら私と同じくらい年齢になってしまったりしているかもしれない」

「うーん、難しいね……。あ、ところで青山さんって何歳なんですか？」

「トップシュークレットです。うふふ」

とりあえず、千夜ちゃんには今までのことを思い出してもらおうことに専念してもらい、時間的なずれの問題については並行世界のココアお姉さん（仮）の知恵と力を借りつつ解決した方が良いとの結論に達した。

お店をあとにして、街をとことこ歩く。

「だいぶ時間が経ちましたね、そろそろホテルに帰りましょうか。原稿が書けてないことがバレたら——」

「バレたらどうなるんですか？」

「もちろん鬼に怒られ、あ」

「凜ちゃんさん！」

振り向くと、燃えさかるようなオーラを発している凜ちゃんさんが仁王立ちしていた。つかつかと私達の方に歩み寄ってきて、青山さんの肩を両手でガシッと掴んだ。

「今夜は寝かせませんよ♥」

「あーれー……………」

すごい勢いで青山さんが引きずられていって視界から消えた。

「……私達も戻るか」

「そうだね……………」

その日の夕食の時間、すべての力を放出して真っ白に燃え尽きた青山さんと凜ちゃんさんが、レストランの片隅でテーブルに突っ伏していた。

日曜日、木組みの街に帰る時が来た。前と同じ失敗をしないよう、事前に荷物を綺麗にまとめて忘れ物がないかどうかを念入りに確認し、ホテルをチェックアウト。支配人さん達に見送られてトラムに乗り、みんなで駅に移動した。

「電車が入ってくるまでもう少し時間があるね。お土産を見てくるついでにちよつと探検してこよつかな」

「面白そうだなココア。私もついていっていいか？」

「もちろん！」

「乗り遅れないよう気をつけてね」

ここに来た時はもう夜中でほとんど回ることができていなかったの、駅のまわりはまだまだ探検する場所がいっぱいある。でも、夢中になっていると電車のことを忘れてしまいそうなので注意注意……

ここは、百の橋と輝きの都を代表する大きな駅だけあって、人がたくさん

行き交っていて、お店もたくさん集まっていた。街中のいろいろなもので買えそうな勢いだったし、もちろんお土産になりそうなものもいっぱいあった。他の街から来ている品物もあつたりして、ふととてもいいなと思つて手に取つてみたら、いつもおなじみ私達の街、木組みの街で作られたものだった。

「とてもしつくりきたから、お土産として買つて帰つてラビットハウスに飾ろうと思つただけだなー」

「まさかのいつも見ているお店の品だったな。帰つたら買いに行くか」

「そうしよう！」

夢中になつていろいろ見ていると、ついまわりへの注意がおろそかになつてしまつていて、

「あつ、ココア後ろ！」

「え？」

「きやつ」

他の人**に**ぶつかってしまいました……。

「ごごごごめんなさい！ 大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫です。……って、あら？」

「千夜じゃないか!」

「千夜ちゃん!？」

つい一昨日おととい会って、また木組みの街で会おうと別れた子に次の日に会うとは思わなかった。

「あ……えーと、あなたは……ちょこちゃん？」

「ココアだよ!? ちょこちゃんはお母さんのニックネーム!」

「ごめんなさい……つい似た感じのものと間違えちゃった……」

「いいよ! のーぷろぶれむ!」

「そうだったの。昨日ココアちゃん達とお別れしてから、またクラスみんなと合流して、お別れ会があったの。それまでずっと不安だったけど、ココアちゃんやリゼちゃんと会えたから、お別れ会の時も笑顔で手を振ることができて、みんなといういろいろお喋りするメッセージのグループも作っちゃったりできたの。……少しはスマートフォンを操るようにならなきゃ」

「よかったね！　じゃあそのグループを私達の方でも作ろっか！」

「それはいいな」

そうして、私、リゼちゃん、千夜ちゃんの三人でグループを作りました！

「えーつと、メッセージを送るのってこれでいいのかしら……？」

「どれどれ……ブフツ、なんか同じ絵文字が十五個くらい並んでるぞ」

「ちよつと押してたら一気に入っちゃって、しかも消そうと思ったら間違えて送るボタン押しちゃったみたい」

「大丈夫、時々使つてたら慣れると思う！」

千夜ちゃんとお喋りしていたら、そろそろ電車が出る時間になった。

「ところで、千夜ちゃんも十二時発の電車？」

「ええ。その電車で木組みの街まで」

千夜ちゃんに切符を見せてもらつたので、私達のと見比べてみた。

「うーん、さすがに乗る席は三両分くらい離れてたかー」

「ま、あつちで電車降りたらまたすぐ会えるしな」

「そうね♪」

千夜ちゃんのご両親と合流するらしいので、ここで一旦お別れ。私達もみんなの所に戻らなきゃ。

「それじゃ、また後で！」

サキさんや青山さん達がいる所に戻り、電車に乗り込むと間もなく発車

した。

「短い旅だったけど、千夜を見つけられたし、美味しい物を食べられたし、面白いところをいろいろ巡ることができてよかったな」

「うん、そうだね。とつてもわくわくした！」

「楽しめたようで何よりだよ。またお店を休んでみんなで来ましょう？」

「いいですね、いつでも呼んでください」

「翠みどりちゃん、青山先生は原稿をきちっと書き上げてからおでかけしてください」

「さー！」

「うふふふ」

「フフツ、青山君がそれを果たすのは無理そうだな」

「いいえタカヒロさん、私はやるときはやるんです、たぶん」

帰りは車窓がよく見えたので、ずっと景色を眺めたり、写真を撮ったりして

いたら、あつという間に木組みの街に到着した。降りた後にまた千夜ちゃんご一家と会ってみんなでご挨拶。そしてその場で、私とりぜちゃんごで、来週末に歓迎会を開くことを決めた。

「会場はどこにしよつか？」

「うちはどうかしら？ 『甘兎庵』 つていう和の喫茶店で、今はおばあちゃんが一人で切り盛りしてるんだけど、今度から私もお手伝いするの」

「ああ、あそこのお店か。よく知ってるぞ」

「決まり！ うちからパウンドケーキとか作って持っていこつか」

「嬉しい♪ うちのおばあちゃんが対抗して最高級の和菓子を作るつて言いそう」

「和菓子と洋菓子？ の食べ比べだね！」

歓迎会のメニューも決まったところでお別れして、千夜ちゃんご一家は甘兎

庵へ、私達はラビットハウスへ帰還した。明日からはまた日常が始まる。私達は学校、サキさんとタカヒロさんはラビットハウスの営業、青山さんと凜ちゃんさんは執筆のお仕事。

みんなを取り戻す作戦が、また一歩進んだ。

*

*

*

千夜ちゃんが何年生なのかという疑問の答えは、翌々日の火曜日に明らかになった。

「今日は転校生の紹介をします。宇治松さん、こちらへ」

「は、はいっ」

うちのクラスに、季節外れの転入生が来ました。

「宇治松千夜です。両親の仕事の都合で、祖母の家があるこちらに引っ越して来ました。よろしくお願ひします。……あつ」

ちよつぱり不安そうな顔をしていた千夜ちゃんが、私に気付いた瞬間笑顔になった。

「椅子と机を運び込みましょうか。置ける場所は二箇所ありますが、どちらにします」

「はい先生こつちがいいです！」

「あら、保登さん積極的ですね。宇治松さんはあちらの方でいいですか？」

「はい♪ ココアちゃ、保登さんとは引っ越しの直前に向こうの街で仲良くなったので♪」

千夜ちゃんの言葉に、先生を含めて教室内の全員がどよめいた。

私の席の横にあった空間に椅子と机が運び込まれ、千夜ちゃんがそこに座つ

た。まさか同じクラスになれたなんて。

ホームルームが終わり、一時間目の授業が始まるまでの十分間のうちに、多くのクラスメイトが千夜ちゃんの席に集合した。

「千夜さんのおうちってどのあたり？」

「街の真ん中あたりの和風喫茶で、『甘兎庵』って言うところなの」

「あ、知ってる！　なんかお店に入ると真正面にブラックホールみたいなうさぎがいるところ！　向かい合っていると世界の深淵しんえんが覗のぞけそうな感じ！」

「メニューじゃなくてうさぎの方を覚えてるんかい！」

「あら、あんこともう会ってるのね」

「あんこ……？　それがうさぎさんの名前？」

「ええ♪」

うん、千夜ちゃんのこの感じは、もとの世界の千夜ちゃんそっくりだね。よ

かったよかった。

「喫茶店なんだから、うさぎの方だけじゃなくて、何かお店のメニューの方でも覚えてあげなよ」

「そうだねー、お店のメニューといえば、なんかデカイパフェがあったなー。名前なんだったつけ？」

「覚えてないんかいっ」

「……やはりメニューの名前を覚えてもらうには、その特徴を余すところなく表現した、お客様の心をわしづかみにするような名前を……」

千夜ちゃんが急に難しい顔をして空中に何かを書き始めたので声をかけた。

「千夜ちゃん？」

「……え？ はい、なあにココアちゃん？」

「なんか急に考え始めたみたいだけどどうしたの？」

「ええ。甘兎庵を大きくしていくための第一歩のヒントをつかんだの」

千夜ちゃんの早速の野望を聞いて、また少し安心した。

午前中の授業は、どの先生も千夜ちゃんの高校との授業進度の差を確認しつつ進んでいった。やっぱり学校によって細かい進度の違いがあるみたいで、千夜ちゃんの高校の方が少し先をやっていたみたいだった。

お昼休み。お弁当を食べたら校内を案内することになっていた。

「千夜ちゃんの学校って授業の進みが速かったりした？」

「そんなことはなかったと思うけど……」

「それともうちがゆっくりなのかな？ おばあちゃん先生もいるし」

「おばあちゃん先生はほわほわしてて良かったわ。なんだかシンパシーを感じちゃった」

「わかるー」

特別教室や体育館、図書館の場所を案内して回っている時の千夜ちゃんの反応が新鮮だった。普段見慣れた学校も、何も知らない状態で見ると、自分では思ってもみなかつたいろいろな発見がある。——一方で、それはまだ千夜ちゃんが元の世界の記憶を取り戻していないことの証明でもあった。

「ここが中庭。もう少し経つと紫陽花あじさいが咲くよ」

「ええ、とても色とりどりの——あら？ なぜかこの光景が頭に思い浮かんだのだけれど。私はここに初めて来たはずなのに……」

もしかして、記憶が呼び覚まされようとしているのかな？

「デジャヴなのか、それとも前世ぜんせの記憶？」

「——もしかしたら、自分が忘れている本当の記憶かもしれないよ」

「そうかしら？」

千夜ちゃんの記憶が早く戻ることを願って、それに気付けるように、少しだ

け誘導をした。その後は特に何かを思い出すようなこともなかったみたいで、放課後は他のクラスメイトも一緒になって一通り部活動の見学をして、それから一緒に下校している間も、特に変わりない感じの会話だった。

次の日から、授業で教え合ったり、体育の授業でペアを組んで柔軟体操じゆうなんたいそうでお互いの身体をバキバキに破壊しあったり、友達と一緒に頑張ってご飯を食べたりしている時にも、新たに思い出す物事はなかった。リゼちゃんの時くらいは時間がかかりそうだし、こういうのは焦あせっちゃいけないじゃない……。

そして週末。待ちに待った千夜ちゃんのミニ歓迎会の日になった。千夜ちゃんちに持って行くパウンドケーキを焼くために早起きして準備をした。いつもはリゼ教官に起こされるところ、今日だけはリゼちゃんよりばっちり早起きで

きました！ ……五分だけ。

「よし、できた！」

「さすがだなココア」

「いやりゼちゃんのの方がすごいよ！ 私がキッチンを半分占拠せんきよしている隅でパ
ッとみんなの分の朝食を作っちゃったんだから！」

「すごいわりゼちゃん。将来はシェフもいいんじゃないかしら？」

「サキさん褒め過ぎです…私が出したのはスクランブルエッグとウインナー
を焼いただけであつて…」

「ううん！ すごい！ ココア認定すごいで賞を贈呈ぞうていしますっ」

「なんかココア認定だとあまりすごくない気がする…」

「もー！」

今日の歓迎会ではりゼちゃんの分のパウンドケーキを三ミリ削っちゃう

から！

お昼前に甘兎庵を訪問すると、目の前に兎の王様がいた。

「うさぎが王冠をかぶっている……？」

『ふふふ……我がしもべの歓迎会に来たようだな……褒めてつかわす。くるしゅうない、近う寄れ』

「はっ、ははーっ……？」

『その貢ぎ物、ありがたく頂こう……』

「千夜ー、着物の裾が見えてるぞー」

「えっ」

何も見えていないところに、リゼちゃんが犯人を罠にかけるように声を発したところで、物陰から驚きの声とゴソゴソと動く音が聞こえてきた。

「きちんと隠れていたはずなのに……？」

「引つかかったな。なんとなくいそうなところに声をかけて出方を見る。作戦の基本だ」

「敵は手ごわいようね……」

なぜか二人からオーラが立ちのぼり始めて、謎の戦いが始まりそうになっていたので、慌てて止めに入った。

「はいはいはいはい！ バトルは後にして！ リゼちゃんの分のケーキを厚さ一ミリにしちゃうよ！」

「ひどい！」

リゼちゃんが途端に涙目になって止まったのでよしよしして、ケーキを薄くする罰は無しにした。

「ジュースの準備は大丈夫？」

「大丈夫だ」

「大丈夫よ」

「はい、それでは、千夜ちゃんようこそ木組みの街へ！　これから仲良くなるうね!!　かんぱーい！」

「かんぱーい！」

「かんぱーい、うふふ♪」

歓迎会では、千夜ちゃんから今週どんな感じだったか話を聞くことができた。学校帰りにちよつと遠回りして街をちよつと歩いてみて、とてもこの街を知っているような気がするくらいあつという間に馴染なじめたらしい。さすが千夜ちゃん。

せっかくなので、歓迎会の後、腹ごなしついでに木組みの街探検に繰り出すことにした。千夜ちゃんに街を案内して回るといのは、本当はとてもヘンな

ことなただけど。もしかしたら、いろいろ見て回ったら、それだけ記憶を取り戻すのが早くなるかもしれない。

「最後は街をよく見渡せる展望台に行こう！」

「この時間になると、また前みたいにかップルだらけになってそうだな……」

「三人いれば大丈夫！ たぶん！」

「何が大丈夫なのかは分からないが、まあ、行ってみるか。綺麗な景色が見えるぞ」

「そうなのさ、楽しみ♪」

展望台がある山の上まで登ると、今日もまたカップルで賑わっていた。夕焼けと街の光が合わさって眼下に煌きらめいていた。

「すごい……」

「ね？」

千夜ちゃんは目を輝かせて景色に見入っていた。

「初めて見る景色なのに、なんだか初めてじゃないみたい。ちよつと懐かしいような」

「……やっぱり、何かの記憶が眠ってるのかな？ 高校でも同じ感じなことがあつたし」

疑問形で尋ねてみたけど、実際のところ、私が、あるいはリゼちゃんも、期待しているのはひとつだった。私達とこの街で過ごした記憶、この街に来た私と出会ってようかんをくれた記憶、一緒の高校に通った記憶、一緒に遊んだ記憶……

「ま、デジャヴつてわりとあることらしいし」

ちよつと重くなりかけた雰囲気を、リゼちゃんが明るい声で吹き払ってくれた。

「初めてでも、初めてじゃなくても、いつでも初めてってことで楽しんでこう！」

だから、それに応えるように、私もさらに場を明るくする方に向けた。

週明け、千夜ちゃんとの高校生活はあつという間に昔馴染みモードになった。クラスメイトのなつちゃんやレイちゃん、委員長から「ココアと千夜ってひよつとして幼馴染だった？」って尋ねられたくらいだった。

「なんとというか、幼馴染というより、長年一緒に暮らしている夫婦というか、結成数十年の漫才コンビというか」

「いやいやいやいや」

「ほら、息ぴったり」

「「えへへ」」

「息ぴったりだねー、一心同体だねー」

コンビ結成は近いかもしれない。ラビットハウスに帰ってきてこのことをリゼちゃんに言うとうと、

「やっぱり一緒の学校はうらやましい……」

と、ちよつぴりジェラシー成分入りの返事をもらったので、週末に私、リゼちゃん、千夜ちゃんを改めてトリオを結成した。いつも三人でいるからあまり変わらないといえば変わらないね。

そして、歓迎会から二週間ほど経った金曜日の放課後のこと。

「ココアちゃん、私おかしくなつちやつたみたい……」

千夜ちゃんが深刻そうな顔で自分の席に戻ってきた。つい五分前まで、いつもと変わらないニコニコ笑顔で話をして、それからちよつとトイレに行っただ

けのはずなのに。

「どうしたの？」

「……ココアちゃんは、ココアちゃんよね？」

「？ 私は確かに私だけけど？」

「リゼちゃんも……リゼちゃんよね……？」

「そうだけど……何かあったの？」

「……シャロちゃんは、どこ？」

固まった。改めて千夜ちゃんを見る。今にも泣きそうな顔で、私の方を見つめていた。

「全部、思い出したんだね。……話をしたいからラビットハウスに来てほしい

「ただけど、時間は大丈夫かな？」

「大丈夫。何かがあっても全部後回しにするわ。今はこのことが一番重要だもの」

「わかった。リゼちゃんも呼ぶね」

すぐにリゼちゃん宛てにメッセージを入れた。返信も速く、なんかもう校門を飛び出してラビットハウスに向けて走っているらしい。気をつけて来るように返して、私と千夜ちゃんもラビットハウスに向かった。

私とリゼちゃんの部屋で話をすることにして、まずはお互い心を落ち着けるために、カモミールティーを淹れた。ここにシャロちゃんがいたら、きつと同じハーブティーを選んで淹れたに違いない。

「全部話せばとても長くなって、明日の朝どころか明後日の朝になってしまう

かもしれないくらい長いんだけど、できる限り大事なところだけを話してくね」

「わかつたわ。お願い、ココアちゃん」

それから、世界の現状のこと、みんなが別々の世界に飛ばされてしまっていること、今この世界にいると確実に分かっているのは私、リゼちゃん、千夜ちゃんだけなことなどを順を追って話した。並行世界にいる年上の私——ココアお姉さん（仮）がお手伝いをしてきていることや、青山さんがアドバイスをくれていることも話した。

「——というわけで、今私達はみんなをずっと探してるんだ。千夜ちゃんのこと、ココアお姉さん（仮）が見つけて教えてくれて、それからみんなに協力してもらって、木組みの街から百の橋と輝きの都まで千夜ちゃんを探しに来たの。すぐに会えて、仲良くなれて良かった」

「……実はね、あの時ココアちゃんやりげちゃんに出会って、なんだか懐かしい気がしたの。初めて会ったはずなのに、なんか今までいつも会っていた人と久し振りに会ったような、そんな感じがしたのね」

「そうだったのか。やっぱり、忘れてしまっても、記憶の奥底には残っているのかもしれないな。あるいは、世界をつないで、さらにこうやって忘れていたことを思い出させていくのが、ココアの『まじゅつ』かもしれない」

確かに、そうかもしれない。『まじゅつ』を扱う私だけではなくて、科学的な力でいろいろ解き明かしていく並行世界の私も一緒になって探し出して解決していつているんだけど。

「さて、せっかくなら並行世界の私とも話をしたいところだけど、この時間はたぶんお仕事だろうな……」

「一応連絡してみたらどうだ？」

「そうだね。ちょっとティツピーを呼んでこなきゃ」

ベランダのところでした。それがれていたティツピーを捕まえてきて、並行世界の私へのコンタクトを試みた。

『——こちらはココアです。ただいま留守にしております。ご利用があるお客様はピーツという発信音が鳴った後にご利用をお話しくください。ピーツ』

「それって何のまねっこコンテスト？」

『……え？ まさかこの文化が通じていない？ ジェネレーションギャップ？ それともセカイの違いによる文化の違い？』

「なんだかよく分からんが、とりあえずそちらのココアがまさに目の前にいることは分かった」

『だずげで……』

急に泣き声で助けを求めてきたココアお姉さん（仮）のことが心配になっ

た。涙をぼろぼろこぼしているのがとてもよく想像できた。

「おなかがすいた？」

『うん……チノちゃんがちよつと出張に行つて、明後日まで私一人なん
だー……』

「料理とかしないの？」

『できない……私の頭脳はそっちの私がつっているような料理の腕と引き換え
だったのだー……』

「いやいや、それならどこかに食べに行くとか……」

『諸般の事情によりお店は出禁なのだ……』

「何やったの!？」

『後でいずれ喋ります……』

「どこかで買うことはできないのか？」

『コンビニ——こっちの世界のなんでも屋さんが臨時休業で……』

「その店は他にはないのか」

『よそこにもあると気づいた時にはもうおなかが空き過ぎて動けなくなっていたのだった……』

「おいおい……」

とはいえ、世界越しでは直接支援することもできないので、自力でなんとかしてくれるまで待つしかなかった。

『ふーつ、なんとかパンとスープを見つげられた……』

「そんな壊滅的な生活じゃ、そっちのチノからまたぐーでぼこぼこにされるんじゃないか？」

『ヒッ』

さつき私とリゼちゃんが千夜ちゃんにした世界の話を、元気になったココアお姉さん（仮）がわかりやすくまとめる形でもう一度話してくれた。そのおかげで、私も改めて今起きている現象のことを捉え直すことができた。

「えつと、ココア、お姉ちゃん？」

『なになに千夜ちゃん？ お姉ちゃんが何でも答えちゃうよ！ もっと呼んでくれてもいいんだよ!?!』

「『お姉ちゃん』の単語にがつつくのはどの世界でも変わらないか……」

『ぶー、リゼちゃんひどい』

話を先に進めるために、適当なところで仕切って千夜ちゃんを促した。

「あちらの世界？ のチノちゃんは、私達の世界のチノちゃんとは別、なのよね？」

『そうだね。木組みの街の世界にいる千夜ちゃんと、こちらの世界の——仮にαと呼んでる世界の——千夜ちゃんは別の存在だね。そして、そちらの世界の千夜ちゃんの行方はまたつかめていない』

「そうなの……」

相変わらずいろいろと分からないことだらけながら、千夜ちゃんの記憶が取り戻されたのは大きな前進だった。ココアお姉さん（仮）とのやり取りを終えた後、みんなしばらく押し黙ったままだった。ひとまず、千夜ちゃんに状況や心の中を整理してもらうため、今日はここで解散となった。

それから丸一日経った土曜日の夕方、千夜ちゃんから二人揃って甘兎庵に来てほしいと連絡を受けたので、ラビットハウスでのお仕事が終わったあと、すぐにリゼちゃんと一緒に甘兎庵に駆けつけた。ココアお姉さん（仮）の助けも

必要かもしれないなかったので、ティップピーも連れていった。

千夜ちゃんに案内されるまま千夜ちゃんの部屋に入り、ひとまず座った。千夜ちゃんは私達の向かいで目を閉じ、息を整えたあたりで目を見開いた。その表情には並々ならぬ決意が籠もっていた。ちらりと窓の向こうに目をやり、少し目を伏せ、それからまたきつと視線を上げた。窓の向こうに見える空き家、本当ならシャロちゃんが住んでいる家は暗闇に沈んでいた。

「ココアちゃん、リゼちゃん。……そして別のセカイのココアちゃん」

「うん」

「私、シャロちゃんを絶対に見つけるわ」

不退転の決意を感じさせる言葉だった。いつものほわほわとした雰囲気はそこにはなく、今までにないような、研ぎ澄まされた意志を感じた。

『千夜ちゃんなら、そっちの私やリゼちゃんより、もっとシャロちゃんの手掛

かりをつかみ取りやすいと思う』

「うん！ 幼馴染パワーで引き寄せられると思う！」

「千夜がシャロにつながる手がかりを重点的に探しつつ、私とココアが引き続き全体の捜索を続ける、というのはどうかな」

リゼちゃんの提案に、私と千夜ちゃん、そしてティッピーがうなずいた。シャロちゃんのもとより、チノちゃん、マヤちゃん、メグちゃんを探して、また元通り一緒になりたい。リゼちゃんや千夜ちゃんを見つけられたんだ、ほかのみんなも必ずすぐに見つけられる。

「全員を早く見つけられるように、がんばろう！」

「「おーっ！」「」」

（『セカイにひとり』 中巻第三号に続く）

第二部 遠き母の背を追いかけて

遠き母の背を追いかけて

私がラビットハウスに家出した「事件」のあと、親父と久々に話をして、和解したその日の夜。私は長い間避けていた、家の中のとある部屋に足を踏み入れた。その部屋の主はもう長い間不在であることを私は知っている。屋敷を世話するメイドさんによって定期的に清掃されていて、その部屋の姿が一分の隙もなく整ったままであることが、不在をより一層深く印象付けていた。

「母さん、私、改めて先生を目指すことにしたよ。小学校の先生さ——」

* * *

私が物心ついて間もないころは、母とともに木組みの街を散歩するのが日課みたいなものだった。公園でうさぎをモフモフして遊んだり、たまには同い年くらいの子たちと遊んだり、時には母にお菓子を買ってもらったりすることもあった。家に帰ればいつでも高級そうなお菓子が品切れすることなく揃っていたけれど、そうして街で買ってもらったお菓子の方が、今でも鮮明に記憶に残っている。それは、今は遠く離れたところにいる母と結びついているためかもしれない。

ある日、母は家を去った。理由はよくわからない。幼い私は、仕事で家を空

けがちだった親父に出会うたびに何度となく尋ねてみたが、いつも親父は寂しそうな顔をして、「お母さんは、しばらく帰ってこないんだ」とだけ語った。そしていつしか、数少ない親父との会話において、母の話題は自然と避けられることになった。

母がいなくなつてから、私の遊び場所は家の敷地が主になった。相手は屋敷の世話をしてくれているメイドさん達や、親父の部下たち、そしてユラだった。ユラのこと、初めは親父の知り合いの子がよく遊びに来るようになったんだと思つていた。実は母と街歩きをしていた頃から陰でボディガードをしていたと知つたのはだいぶ後の話。

母がいなくなつた理由については、執事もメイド長も口を閉ざしていた。尋ねると、いつも「そのことは、時が来たら御父上が自らお話しになることでしょう」とだけ返つてきていた。その時がいつになるかはわからなかった。

中学三年になったとき、学校の授業で、自分の進路について考える機会があった。親父は軍閥系の仕事で、昔の私はぼんやりと親父みたいな仕事がしてみたいなと思っていたりした。ただ、当時それを親父に話したら、一瞬渋い顔をされて、逆に提案を受けた。他の仕事はどうだろうか、と。それ以来ずっと答えが出ないままだったけど、ふと思いついたことがあった。母はどのような仕事をしていたのだろう、と。母と親父が出会って結婚する前、母は何年か仕事をしていたらしいと聞いたのをかすかに覚えていた。今度親父に会った時に聞こうと思ったが、なかなかその機会は訪れなかった。

休みの日の朝食の席。今日も親父は出張で不在だった。親父と一緒に食事を摂る機会は週に一回必ず設けられていたはずだが、ここ最近は何月にも一回くらいまで減っていた。最近は何親父と会うのが何か息苦しく感じていたので、食事が

ひとりになるのは少し気が楽に思う反面、寂しくもあった。時々はユラが付き合ってくれることもあったが、月の大半はひとりでの食事だった。親父とともに外出することもあろうはずがなく、まるでこの家に一人暮らししているかのようだった。いや、メイド長や執事もいるし、決して一人というわけではないのだが……。

親父に聞けないなら、母のことをよく知る人は誰だろうか。少し考え、そばに控えていたメイド長に切り出した。

「あの、少し聞きたいことがあるんだが……」

「なんでしよう、リゼお嬢様」

「例によって、母の話なんだが……」

「そうですね、御父上がお話しになるまでは、私から申し上げることができないことは限られております」

「母は、親父と結婚する前、どのような仕事をしていたんだ？」

メイド長は目を見張り、その後少し息をついてから口を開いた。

「その件については、いつでも話してよいと御父上から仰せつかっております」

小学校の教師。それが、かつての母の職だった。

「御母上は、それはたいそう立派な方でした。私が天々座家にお仕えしてだいぶ経つた頃、御父上とご結婚されて当家にいらつしやいました。大変快活な方であらせられながら、街一番の淑女レディでもございました」

私の性格の半分、快活なところは母から受け継いだものであるかもしれない。ただ、私には淑やかさが足りない。自覚はしているがいまだに身につけられず、メイド長から小言を頂戴ちやうだいするのが常だった。

「御母上は、隣の街の小学校で教職についておられました。ご結婚されてからもお仕事を続けられる選択をされまして、精力的に活動しておいででした」

ただ、とメイド長は続けた。

「ゆえあつて御母上がこの地を離れられることとなり、その折に教職からも退しりぞかれました」

「その理由は……親父に直接聞かないといけないんだろうな」

「そうでございますね。私わたくしめが勝手に口を滑らせるわけにはまいりませんもの」

メイド長は顔に深い皺しわを作つて微笑んだ。

次は先代の執事に話を聞いてみたいが、残念ながら連絡先を知らない。執事は先日代替わりして、母がいたところを知る人はすでに引退していた。近所の

人、あるいは隣の街の人なら何かを知っているかもしれない。時間はすでに午後を回り、今から隣の街に行つて聞き込みをするには遅い気がした。となると近所の人か。ちよつと出歩いてくることにしよう。

私が学校や家の用事以外で外出する時は、ボディガードこそつかないものの、遠くから見守るための部隊が展開しているらしい。残念ながら私の気配察知能力では探知できない。親父がなぜそこまで手を回すのかはよく分からないが、メイド長はいつも「お嬢様への愛ゆえでございます」と答えていた。今回はそこまで遠出せず、家から少し歩いたところに、昔からずっとある喫茶店に入つてみることにした。話を何か聞けるだろうか。

「いらつしやいませ。お好きなお席へどうぞ」

「お、お邪魔します」

マスターの所に近い、カウンター席に座った。こういう洒落た雰囲しやれ気の喫茶店に来るのは初めてだった。中学生にとつてはやはり敷居が高い。ちよつとどきどきしながらオリジナルブレンドコーヒーを注文した。

「どうぞ、オリジナルブレンドです」

「ありがとうございます」

一口飲んだ。今まで飲んだことのないおいしさだった。コーヒーをもっと飲んでいれば、味の具合を細かく表現できるのだろうけど、今の私はとてもおいしいという表現しか持ち合わせていなかった。

「おいしいです」

「ありがとうございます」

たまたま、今の時間は私以外にお客さんがいなかった。何か話を聞けなら今がチャンスだった。勇気を出して、マスターに声をかけた。

「あの、マスター」

「なんでしよう、お嬢さん」

マスターはカップを磨いていた手を止め、微笑みを浮かべて私の方を向いた。

「その、私、少し話を聞きに来たんです。よろしいでしょうか」

「私に話せることなら何なりと」

「ありがとうございます。私、天々座理世てでざりぜつていいいます。その近所の」

「天々座様のお嬢さんでいらつしやいましたか。いつもご贖ひいきにしてくださいありがとうございます」

「あ、いえ」

聞くところによると、我が家の美味しいコーヒーは、私が生まれるはるか以前より、このお店から仕入れているらしい。母のことを尋ねると、マスターは

深く頷うなずいた。

「お嬢さんは、確かに御母上にそっくりでいらつしやる。一瞬、時さかを遡かのぼつてこちらに戻つていらしたのかと思つて驚いておりました」

「母のことをご存じですか」

「はい。月に二回ほど、週末にお越しいただいております。日々の疲れを癒いせるよいところだと、お褒ほめの言葉を何度もいただき、恐縮する次第です」

「そうだったんですね。……私、母のことをよく知らなくて。ついさつき、うちのメイド長から、母が小学校の先生をしていた話を聞いたばかりなんです。その、将来の進路を考へるときに、母の仕事がどんな感じだった、母が、どんな人だったか……とか、知りたいと思つて」

「そうですね……この老いぼれの知ることが少しばかりでも助けになりますなら

そう言うのと、マスターはコーヒーのお代わりを入れてくれ、母の思い出を語ってくれた。

「お嬢さんの御母上がこちらに初めていらつしやったのは、御母上が大学生の頃であつたと記憶しております。偶然立ち寄られたというこの店を気に入ってください、それから事あるごとにお越しいただきました。とても明るいお方で、こちらにいらつしやると途端に店の雰囲気はなが華やぎ、お客様の数もその日は増えたので、まだ軌道に乗つていなかった頃のこの店と私を助けてくださつた女神様、と呼んでも過言ではありません」

自分の記憶にある母は明るい感じではあつたけど、お店の雰囲気を盛り上げるほどだったとは知らなかつた。

「御母上が小学校の先生になれたと、私に嬉しそうに知らせてくれた日は昨日

のこのように覚えております。明るく、人と向かい合つてその人のためになることをただ一途いちずに考え、伝授し、ともに歩んでくれる。そのような方が先生になるのは、まさに天職であり、多くの子どもたちにとつても福音ふくいんでありました」

母のことながら、なんだかこそばゆい気分になった。マスターはカップを磨きながら、話を続けた。

「小学校の先生としてご活動されるようになってからも、当店には定期的にお越しくださいました。時に楽しい話を私に教えてくださることがあれば、時に仕事の上でのお悩みに耳を傾けることもありました」

「それから一年後くらいでしたか、御母上がいらっしゃっていた時に、天々座様——お嬢さんの御父上がたまたま当店にお越しになり、一目で恋に落ちたそうでございます。決してすぐにご結婚されたわけではなくて、いろいろありま

したようですが、一年ほどかけてお付き合いをされ、祝言しゅうげんを上げられました」
そこまで話をすると、一旦マスターは口を閉じ、他に誰もいない店は静寂せいじやくに包まれた。親父と母が結婚したその先、待ち受けている出来事は残りふたつ。

「それからしばらくこちらにはいらつしやいませんでしたが、風の便りで、ご息女そくじよがお生まれになったと伺いました。それがお嬢さんのことだったのでしよう。我がことのように喜んだのは忘れられません」

「……御母上が最後にお越しくくださったのは、産前産後のお休みを終えて、小学校に戻られる前の日のことでした。その時、直接お嬢さんのことをお話しくださいました。私からもささやかな祝いの品を贈らせていただきました。その日以来、お越しにはなりません」

「……そうですか。ありがとうございます。母がどのような先生だったか、今まで知ることがありませんでしたので、話を聞けてとても良かったです」

「お役に立てましたならば、何よりです」

再びの静寂。そして、ふと思ひ浮かんだ。

「ところで、母の写真はここにありましたりしますか。家にはなぜか一枚も残されていなくて……」

「確か、当店に雑誌の取材がありました折に、お客様として写真に収まったものがありましたな」

そう言うと、マスターは店の裏手から一枚のケースに入れられた雑誌のページを見せてくれた。お店の紹介とマスターへのインタビュー記事、そしてその片隅にあった店内の写真に、私によく似た女の人が写っていた。

「これが……母さん……」

ぼたぼたと、ケースの上に水滴が零れ落ちた。それが自分の涙だと気づくまでにしばらくかかった。記憶にあるおぼろげな母の姿が、はつきりと像になった。不意に、母が遠く離れていることへの寂しさがこみ上げてきた。マスターが差し出してくれたハンカチーフで、涙を押さえなくてもずっと止まらなかった。

もしよろしければ、その記事ごと写真をお持ちください、とのマスターからの申し出はありがたかったが辞退した。今は写真の母の姿を見るだけでとても寂しくなるに違いなかったから。それから家までの帰り道はあまり覚えていない。気がつくに入浴も済ませ、ベッドに倒れこんでいた。

親父にも話を聞こうと決心するまでに、一週間かかった。その日の夜、およそひと月ぶりの親父との食事会だった。いつもだとぼつりぼつりとしか話をしないが、今日こそは何とか話をしないと。その一心で、夜が来るのを待った。

久々に会った親父は、なんだか疲れているように見えた。お互いに静かなまま食事をし、食後の飲み物として、いつもの紅茶ではなくコーヒを頼んだ。メイド長が手ずから淹れたコーヒは、先週訪れたあのお店に勝るとも劣らない美味しさだった。

「そろそろ受験だったな」

「ああ」

「勉強も順調なようでは何よりだ」

「……親父は私の隠し事も知ってそうだよな」

「っ！ い、いや知らないぞっ、ぬいぐるみを作るのが上手だとかは知らないぞっ」

「なっどうしてそれをつ！」

思わぬことを知られていることがわかって取り乱しかけたが、今日のメイン

はそちらではない。

「……いや、そのことは後回しだな。親父は私のことをなんでも知ってそうだけれど、でも、私は親父のことを何も知らない」

そして、ついに口にした。

「……なあ、母さんはどんな人だったんだ……？」

親父の表情が驚きの状態で固まった。五分くらい経っただろうか、その間、私はじつと親父の返答を待った。

「明日、時間があるか？」

「あるけど……」

「ちよつと行きたい場所がある。そこで話したい」

「わかった」

翌朝、親父とともにドライブに出た。最初に着いたのは街で一番高く、見晴らしのいい山の上だった。

「私の妻、リゼの母さんは、この景色がとても好きだった」

「……少し、覚えているよ」

「そうか……。あの頃は、週末にリゼと一緒に街の散歩をするのが日課だったな」

親父は普段の様子とは違い、ゆっくり嘸み締めるように話をし始めた。

「妻と初めて出会ったのは、家の近くの喫茶店だった。最近週末はだいたいぶお客さんが入るようになっていたと聞いていて、その日も賑やかだった。たまたま通されたカウンター席で、隣に座っていたのが彼女だった」

「もし親父から最初にそれを聞いていたら、絶対に嘘をついていると思つたよ」

「なぜだ!？」

「親父のことだから、射撃場しゃげきじょうみたいなミリタリーチックな出会いか、お見合いからの政略結婚せいりやくけつこんだとか、そういう出会い方だろうと思っていたから。まさか小説の出だしみたいな出会いだったとはな」

「リゼとは一度、父親像について十分な認識を共有する会議を開かねばならんようだ」

「ふふっ。日頃の行いだぞ」

「そうか……」

何やら少ししよげてしまったみたいだけど、話の続きはすぐに始まった。

「彼女に会うために、週末ごとに店に通うようになった。はじめはマスターと口裏を合わせて、偶然の再会を装うようにしていたけど、彼女には怪しい動きはバレているみたいだった」

親父はそのあたりの偽装工作というか、話のつなげ方が下手くそだったたと再認識させるエピソードだった。

「三回目に彼女に会ったとき、彼女から『キミは誰を狙っているのかな？ 作戦会議しよっか？』と、いきなり切り出された」

「なんだか、母さんもお茶目だな」

「ああ、その狙っている相手が彼女自身だと言い出す勇気が出なくて、しばらくはその時たまたま店に来ていたサキさん……戦友のタカヒロのパートナーに惚ほれている設定にしていた。もちろんタカヒロとサキさんにも協力してもらってな」

「なんだろうな、ずいぶん大袈裟おおげさな話になっていくような気がするけれど。」

「月に二回の『作戦会議』の中で、お互いにいろいろと深い話をして、そして再確信したんだ。やはり彼女のことが好きだと」

「聞いてるこつちが恥ずかしくなるような甘々エピソードを親父の口から聞けるとは思わなかったよ」

そして、告白の当日。その日も作戦会議と称して喫茶店にふたりしげ込み、閉店とともに店を出たらしい。そしてここにたどり着いた。

『うーん、タカヒロさんは手強いね』

『……そうだな』

『来週は公園でアタックしてみる？』

『……そうするか』

ひとときの静寂。

『……こうして、君と話していると、私の心はとても明るく、温かくなるんだ』

『どうしたの急に？ まるで私に告白しそうな感じだね？』

『仕事の重圧でずっとめげそうだったけど、君と逢うときはそれを忘れて心ゆくまで楽しいひとときを過ごせた』

『……やめてよ』

『君となら、この先もずっと共に歩めると思った』

『そんな、だって、私は』

『好きです』

「思いきって告白したとき、彼女は泣いていたよ。自分で言うとしても恥ずかしくなるが、作戦会議を持ちかけたときからずっと好きだったらしい」

作戦会議がデートになり、やがて結婚を前提とした付き合いになるまで時間はかからなかった。

「……あー、なんだか角砂糖を百個くらい一気に食った気分だ」

「俺も今、猛烈に恥ずかしくなってきた」

初デートでうっかり敵情視察みたいな真似をして大笑いされた話、双方の両親から結婚に反対されて駆け落ちを企てた話、それが親父の戦友を通して軍の内部に知れ渡り、めぐりめぐって親父の一族に話が伝わってしまつて大目玉を食らいつつも結婚を認められた話、私が生まれた時の話。親父は楽しそうに話をした。こんなに楽しい顔を見たのは初めてだったような気がする。

「そして今、妻は、リゼの母さんは遠くにいる。でも大丈夫、元気だそうだ」

「そっか……」

「今はまだ、もう少し待っていてほしい。いずれ会えるから」

「わかつた」

母が遠く離れていることを、ようやくきちんと受け入れられた気がする。こ

の空の下、母が元気であると再認識できただけでも、それでいい。

「家を空けることばかりで、リゼには寂しい思いをさせている。それはすまないと思っている」

「親父……」

「まだしばらく忙しくて、十分な時間は取れないかもしれないが、もう少し話せる時間を作りたい」

「ああ」

「まだ時間はあるか？ 母さんとの思い出の地を少し回りたい」

「いいよ」

それから木組みの街の中をめぐり、いろいろなエピソードを話してくれた。

「リゼは、将来何になるか決めているか？」

「いや、まだ決めていない」

そう、まだ決めていない。今までずっと親父らしい仕事をしてみようかとも思っていた。でも、^{あこが}憧れの人が加わった。母さんみたいなあり方もまた、誰かを守り、導く人の姿なのだろうと。その姿は誇らしく、これからの手本にした
いと思つた。

*

*

*

昔のことを思い返していたら、いつの間にか夜が更^ふけていた。

「母さん、それから小学校の先生になろうと決めるまで二年かかったよ。決め

てからもずっと親父には秘密にしてて、聞かれたから答えたら笑われちゃってさ。それで喧嘩けんかして今日までラビットハウスに家出してた」

そのことは、親父からきちんと謝罪を受けたので水に流した。

「私の大切な友達……ココア、チノ、千夜、シャロ、マヤ、メグからも応援されてるし、立派な先生にならないとな」

さて、今日も遅くなったし、そろそろ寝ようか。おやすみ、母さん。

(『遠き母の背を追いかけて』了)

あとがき

はじめまして。あるいはお久しぶりです。麦と申します。インターネット上ではより詳しく識別するために「麦（穀物P）」と名乗ったりしています。

今年春の三か月間は、三月に情報科学の博士号を取得でき、時間ができたのと、今まで文章を書いてきたその勢いで何かを書こうとして、私が親しんでいるゲーム『ウマ娘 プリティーダービー』の二次創作小説を集中的に書いておりました。それゆえ『ご注文はうさぎですか？』の小説執筆が少々後回しにな

りましたことをお詫びいたします。今後はバランスを取りつつ両方を推進していきます

今回は「セカイにひとり」中巻第二号をお送りします。中巻第二号では、千夜ちゃんとの邂逅を果たしました。徐々に「いつもの」仲間が集まりつつあります。中巻相当の部分を何分冊かけたら書き上げられるか少々怪しくなっている気もしますが、頑張ります。

第二部には短編「遠き母の背を追いかけて」を収録しました。これはかつて *pixiv* にて先代アカウントを運営していた時に投稿した、リゼ先輩が主人公の短編小説「遠き母の背を追いかけて」を改稿し、*pixiv* の当代アカウントに投稿したものです。初代のものと話がかなり変わっているため、同じタイトルと

はいえ再録とは言えない半新規作品かもしれませんが。

こちらもお楽しみいただければ幸いです。

麦
(穀物P)

セカイにひとり ―遠く散ったみんなを探して― 中(二)

著 者：麦（穀物P）

発行元：麦之穂

サイト：<https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先：circle_muginoho@aotake91.net

発行日：二〇二三年（令和五年）八月十二日

印刷所：ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokototo.jp/>)